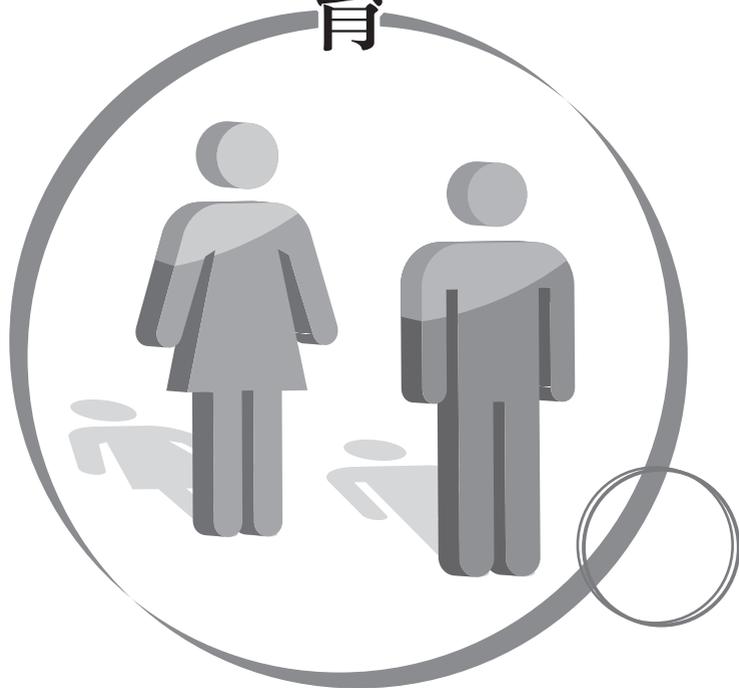


人間教育

特集



リーダーを啓発する

——リーダーセミナーの実際と成果

麗澤大学副学長 井出 元



一 はじめに

大学全入時代を迎えて「学生の質」の保証が問われ、中でも「チームワーク」能力と「リーダーシップ」を身に付けた人材の育成は、現代社会が要請する大学教育の重要な課題である。

また、視点を変えると、このような学生の人間力に注目するという傾向は、最近の学生の協調性や指導力が弱くなったからということであるよりも、教育の本来の姿に立ち返ったように思えるのである。たとえば、紀元前の孔子やプラトンといった古人の開いた学校も、江戸時代の文武両道を唱えた藩校

も、明治期の修身教育も、およそ教育というものは人間関係の大切さを問い、実社会において木鐸ぼくたくとなり得る指導力を養うことが、その本来の目的であった。

しかし、この課題は座学でいかに多くの偉人の生き方を学び、リーダー論を聴いたところで身につくものではない。指導力を身につけるためには先人の生き方に学ぶと同時に、日々のキャンパスライフをとおして、自分自身の意志によって培わなければならない。そのための一つの方法が、現にリーダーという役を負う学生に対する「啓発」である。

ここで紹介するのは、本学における学生の指導力

を養成し、リーダーシップの向上をめざす人間教育の一端である。

二 リーダーセミナーの主旨とその成果

本学においては「リーダー」格の学生は2つに分けられる。まず学友会の会長や大学祭（麗陵祭）実行委員長、さらに課外活動（部活動やサークル活動）の部長やサークル長である（60余名）。次に学生寮のユニット・リーダーである。6人制のユニットを展開する本学には、50余名の学生がユニットのリーダーとして活動している。

これらのリーダー格の学生と話し合っていると、人が成長していく上で大切な葛藤や辛い経験を味わっていることに気づく。たとえば部やサークル活動のためを考えてやっているのにメンバーがついて来ないとか、メンバー各自のモチベーションの違いによって統制がとれないとか、先輩から受け継いだ活動を自分の代で終わらせるわけにはいかないとか、いずれも深刻な悩みである。またユニット・リーダ

ーの悩みは、留学生が半数を占める国際寮であるので、言語や習慣の壁によってさらに深刻なものとなっている。

彼らの悩みはさまざまであるが、リーダーとしての立場に立った者のみが味わう孤独や虚しさといったものが多い。屈強な体育会系の学生が涙を流して訴えることもしばしばである。しかし、この責任感や使命感によって生じる悩みや葛藤こそが人を育てる絶好の機会であると考え、リーダーセミナーに本格的に取り組んだ次第である。

（一）リーダーセミナーの内容

本学では、課外活動の新任リーダーを対象としたセミナーを2月に開催し、新任のユニット・リーダーを対象としたセミナーを3月に開催している。そして、彼らの任期の終了する直前（12月）に全リーダーを対象とした「振り返りの会」を行っている。以下、その内容の概略と主旨、および成果を紹介したい。

① リーダーセミナー（課外活動）

2泊3日、群馬県の谷川にある麗澤大学セミナーハウスが会場となる。平成27年度のセミナーの内容は以下のとおりである。

1日目は午後2時より開会。セミナーのオリエンテーションの後、「リーダーセミナーの意義」（学務部長）「先輩リーダーからのメッセージ」（学長補佐）、および学生支援グループの職員の講話、体験談。夜は学友会主催の懇親会と「学長を囲む会」が開催される。

2日目は朝の雪中散歩から始まり、朝食後、創立者についての講話、「リーダーの役割を楽しむ」と題する学長講話、学友会の承認式。午後は学生相談センターのカウンセラーによるワークショップ、さらに救急救命の実地訓練を含む講話があり、続いて「課外活動を活性化するための課題および解決法」と題するグループワークが開かれる。夕食後は懇親会である。

3日目は朝は雪中の散歩から始まり、朝食後クル

ープワークの成果の発表と総評、そして決意表明とセミナー参加の感想レポートを記述し、昼食を済ませてセミナーは終了する。

② ユニット・リーダーセミナー（学生寮）

このセミナーは開学以来の伝統的な「寮長セミナー」を継承するものである。

1日目は午後2時より開会。オリエンテーションの後、「先輩リーダーからのメッセージ」（学長補佐）「ユニット・リーダーの役割と危機管理」（学務部長）。夕食後ユニット・リーダー会議①（フロア・リーダーの選定、新年度の寮運営の方針）。終了後、懇親会。

2日目は朝の谷川散策から始まり、朝食後、寮教育委員会委員の講話、ユニット・リーダー会議②（新入寮生へのオリエンテーションなどの計画）。さらに創立者についての講話がある。午後は学生相談センターのカウンセラーによる「コミュニケーションスキル・トレーニング」、ユニット・リーダー会議③（年間イベントなどの検討）、続いて寮教育委員会

委員の講話がある。夕食後はユニット・リーダー会議④（部屋割りなど）が夜遅くまで開催される。

3日目も朝から散策、朝食後、会議での決定事項の発表・決意表明など。続いて総括（学長補佐）と任命式が行われ、セミナーに参加した感想を記入して、昼食を済ませてセミナーは終了する。

以上、ハードなスケジュールにもかかわらず、学生たちは意欲的に発言し、リーダー同士の交流を深めている。初日、孤高を誇るリーダー達は、後期の授業も終わり春休み中に学校から召集がかかるので複雑な心地で参加してくる。しかし、2日目あたりから、新任のリーダーとしての共通した不安や悩みを持った友人を得た喜びが、彼らの間を急激に近づけていく。夜を徹して語り合う姿をよく見かける。参加学生は「同じ悩みを抱えた仲間がこんなにたくさん身近に知っていることを知って勇気づけられた」という。セミナーの課題は、それぞれ「課外活動の活性化」および「寮生活の充実」である。そして、最終

日に各自が決意をレポートする。そこにはリーダーとなった誇りと、部員や寮生のために全力を尽くしたいという決意が異口同音に記され、各自はそれぞれの目指すべきリーダー像を描くのである。

そして、先に述べたように、彼らは12月にリーダーとしての経験を振り返るというテーマのもとに、改めて召集されるのである。この「振り返りの会」こそが教育的に重要な意味を持っていると考えている。

（二）12月の合同リーダーセミナーの意義

全リーダーにはあらかじめ「リーダーとしての1年間を振り返って」（リーダーとしての経験をとおして何を学んだか）「次世代リーダーへのアドバイス」という2つの課題）のもとにレポートの提出を課してあり、それに基づいた話し合いの場を設けている。

途中には挫折もあり、多くの苦い思いを噛みしめながらやっとの思いでその最終コーナーにさしかかった彼らには、自信や自負といったものが感じられる。思い通りにいっても、いかなくても、全てリー

リーダーだからこそ味わうことのできた経験を前提としているので、春に集まった時と比べて別人であるかのように逞しく見え、また雄弁である。自らの体験の意義をリーダー同士の話し合いをおして再認識し、それをさらに文字に綴ることによって自覚させることが12月のセミナーの目的である。以下、彼らの手記の一部を紹介したい。

① 経験を省みる

事前に提出されたレポートには「リーダーとして何を心がけて来たか」という記述が多く吐露されている。そこには「メンバーを信じること」「部活動ときちんと向き合うこと」「一人では何もできないという自覚」「信頼関係を築くための努力」「叱り方への配慮」「裏方の大切さ」などが実体験をもとに記されている。

さらに「諦めない、仲間を信じて最後まで全力でやり抜く」という気持ちを持ち続けてやってきた」「組織の中の自分の発言力の大きさについていつも注意していた」「部員の個性に合わせて、それぞ

れに対して異なる接し方を心がけた」というようなリーダーとしての体験からじみ出た言葉は、次世代のリーダーへの最高のエールとなっている。

また学生寮のリーダーに対しては「ユニット・リーダーとしての経験を省みる」と題する共通したテーマのもとに、事前にレポートの提出を課している。そこには辛かった体験を披歴し、それを乗り越えた喜びを記した感動的な文章が綴られている。

② 次世代へのメッセージ

さらに周到な記述は「次世代へのアドバイス」である。全員が実に細かく温かい言葉を後輩のリーダーへと贈っていることに心打たれるものがある。その一部を紹介しよう。

リーダーとしての自覚を「事情はどうあれ、リーダーに任命され、それを引き受けた以上、その使命を全うしてください」と記し、「どんなに人数が少なくても、やるべきことはしっかりとやっていくのがリーダーです」「リーダーは多くの人に支えられています。責任をとるのは1人です」と厳しい言

葉が記されている。

しかし、自らの苦しんだ体験を記し「部全体一人で背負い込むほど苦しいことはありません」「深く考え過ぎて自分を追い詰めないこと」「たとえ失敗してもそこで開き直ったり、諦めたりするのでなく、次に繋げる努力をすれば、長としても、人間としても成長できると思う」といった心温まるアドバイスが記されている。さらに「常に笑顔でいて欲しい」「朝食は必ず食べること」「健康には人一倍注意すること」といった、まるで実の弟妹に語りかけるような温かい言葉が多いことに感心する。

ことに24時間リーダーとして存在しなければならぬユニット・リーダーのアドバイスは生活全般にわたり、外国人留学生への配慮とか、台所、シャワー室の使用法や食器の洗い方、さらに余暇の有効な使い方など、実に小まめな言葉が連ねられている。

自らの経験を「後輩（次世代）のリーダーにどのように伝えるか」を考えたとき、はじめて彼らはリーダーとしての経験の意義を知ることになる。たっ

た10か月で、このように心温まる言葉を、それも親身になって伝言できるようになるとは、リーダーの経験とは、かくも重要なものであるのかと実感させられる。リーダーとしての経験は確実に人としての成長の糧となっていると確信した瞬間である。

これらの先輩リーダーからのメッセージやアドバイスは春のリーダーセミナーで紹介され、新任のリーダー達は真剣に耳を傾けている。先輩からの心温まる伝言は、教職員の説教よりも数倍効果的であることは言うまでもない。そして、彼らが学内に戻ったとき、学生全体のモチベーションが上がるという波及効果がある。トップを引き上げることで、ボトムアップも可能となり、学内風紀を一新していく原動力となることを期待している。

③ 成長を自覚する

12月のセミナーに集まった学生たちは、1年を振り返り、自らの成長を自覚した様子である。たとえば、

「12月のセミナーでは、まず自分のやってきたこ

とへの自信を得ました。次に振り返り、失敗から学ぶことの大切さを知り、さらに後輩へ引き継いでほしいことを考えることの重要性を知りました。グループ討議のなかでは、リーダーを経験したからこそその発言が飛び交い、10か月の間に、全員が確実に成長できたことを実感しました。」

「冬（12月）のセミナーに参加して感じたことは、この1年間、何度も挫けそうになり、辛かった期間もありましたが、諦めずに続けてきてよかったということです。人から見たら小さな変化かもしれませんが、部長としていろいろな経験をさせていただいたことよって自分の中で大きな成長を自覚することができました。」

とも述べている。リーダーとしての体験の中で大部分の学生は自信の喪失を体験するが、もがきながらもやりとおすことが出来たことよって成長したと感じていることが重要である。教育とは、学生一人ひとりに自らの成長を自覚させることにあると再認

識させられた一瞬である。

そして、「1年かけてリーダーとなるという2月のセミナーで聞いた言葉に心からうなづくことができました」と記した学生がいる。「1年かけてリーダーとなれ」とは、春のセミナーで聴いた先輩からのエールである。このような感想の中に、先輩から後輩へと受け継がれる麗澤教育の伝統があり、本学におけるリーダー教育の意義が集約されているように思えるのである。

また12月のセミナーに参加した学生の、次のような感想がセミナーの意義を語っている。

「今回のセミナーに参加して、リーダー体験を体験した人たちと話し合うことよって団体の大小にかかわらずリーダー経験者の思いを知って大変刺激をうけました。このことよって改めてリーダーのあるべき姿を理解しました。このような機会を与えて下さった麗澤大学に感謝します。」

大人になるとは、物事を深く、また広い視野に立つて物事を考えるようになるという変化であり、こ

れこそが人間としての成長である。そして、そのことを学生一人ひとりに自覚させる「場」を設けることが教職員の役割であると考えている。

要するに、本学がリーダー教育に力を注ぐのは、単に課外活動の活性化とか、寮生活の秩序維持のためということではない。それは、リーダーという立場に立つことよって培われる人間としての成長を期待するためである。

三 まとめ

ここに紹介したリーダー教育の試みは、本学における人間教育の一端であり、「あらゆる機会を人格教育に集中する」という創立者の遺志を継ぐものである。

新任リーダーにとつて経験者の適切なアドバイスが必要である。しかし決して解答を提示することではない。古人の「開きて達せず」（解き方は示唆するけれど、解答を教えるはならない。『礼記』学記篇）という言葉は、学生を育てる教職員の心得ておくべき

鉄則であると考えられる。なぜならば、「解答を導き出すまでのプロセス」における葛藤こそが、学生各自の人間力を身に付けさせるからである。答えを提示することは、彼らから人間力を養うチャンスを奪ってしまうことになるのである。12月のレポートは後輩リーダーへの適切なアドバイスである同時に、リーダーとしての体験をとおして自らが導き出した「尊い解答」であることに重要な意味がある。そして、ある学生が次のように記している。

「麗澤大学でのリーダーはあと3か月で終わるが、また新たなリーダーとしての場があると思う。今回のリーダーセミナーをとおして学んだことを、次にリーダーとなる時に活かしていくことよって、リーダーとして更に進化した。」

この一文によつて学生時代におけるリーダーとしての体験は確実に社会人として巣立っていく上での重要な経験として植えつけられ、やがて人として大きく成長していくための糧となっていくことを確信した次第である。

ASPIREの活動と道徳

小磯 尚子

(国際交流・国際協力専攻2年)



私は2年次からASPIRE Reitaku (アスパイアー麗澤)の代表を務めています。2014年6月11日から14日にかけて開催された世界大学総長協会横浜総会には中山理学長と共に、ASPIREのメンバーと学生代表として参加し、私はそこで世界中の学長を前に「道徳教育とASPIREの重要性」についてスピーチをさせて頂きました。スピーチの内容を考えるにあたって中山学長にお話を伺いました。初めて学長と会談させて頂いたため非常に緊張していた私でしたが、大変気さくに接して下さい、その懐の広さと温かさに感慨深いものがありました。また、中山学長より麗澤の教育理念の一つである「自ら進んで義

務と責任を果たし、国際社会に貢献できる人物」の育成には道徳教育が欠かせないと教えて頂き、ASPIREの活動についてさらに意味を持たせることが出来ました。以下がスピーチの内容です。

麗澤大学は、国連アカデミックインパクトの原則6「人々の国際市民としての意識を高める」を推進しています。まず初めに、なぜ麗澤大学がこの原則を推進しているのか、またそれに関しての取り組みについてお話しさせていただきます。

現在の社会はグローバル化が急速に進み、国境を越えての交流がますます必要とされています。その

ような社会において、私たちは自国だけでなく他国の文化や価値観も受け入れることができる国際市民になることが求められています。そのために、国際的な問題や自国のことはもちろん他国の歴史に関する知識を持つ必要が有ります。しかし、知識はただの知識に過ぎません。知識だけを持っていても国際市民は成り立ちません。私たちは知識の有用性を促進し、社会の人間関係を豊かにするために道徳が欠かせない要素であると考えています。知識と道徳を一体させるために麗澤大学では道徳教育に取り組んでいます。そして、私たちにとって麗澤大学で学んだ知識と道徳心を実践できる場所がASPIREです。このASPIREの活動は麗澤大学から多くの国際

市民を輩出することに繋がります。

私たちは昨年9月からASPIRE Japanの1員として、本日の会議に向けて何度もミーティングを重ねてきました。昨日までの学生議論と今日のVoices of the Futureをどのようにするか、最初は白紙の状況から始まりました。ASPIREの活動は学生主体の活動であるため、活動内容をすべて自分たちで考え、決めることから始まります。それがこの活動の醍醐味ではありますが、もちろん簡単なことではありません。このVoices of the Futureの準備も、まさに試行錯誤の連続でした。しかし私たちは確実に進歩し、少しずつメンバーの中で案がまとまるにつれ、私は確かな手応えも感じていました。一つとして無

1 ASPIREは、Action by Students to Promote Innovation and Reform through Educationの略称で、「国連・教育機関・学生」の輪を構築するための架け橋となる組織です。

2 国連の広報局と世界各国の高等教育機関とがパートナーシップを結び、組織的なネットワークキングを介してイニシアティブを助成する世界規模の取り組みです。加盟した教育機関は10原則のうち少なくとも1つ推進しなければなりません。

3 現時点での日本のASPIRE加盟校は桜美林大学、南山大学そして麗澤大学の3校であり、ASPIRE Japanとして一丸となり国連アカデミックインパクト促進のための活動をしています。

4 この総会において私たち学生が担当したプログラム名です。

駄な失敗はありません。数えきれない挑戦があったからこそ、今日の成功があると信じています。

他大学の他専攻、異なる教育的背景をもつ学生とのミーティングは新しい発見や刺激にも繋がりました。また、私の視野がどれほど狭かったかを実感させられました。

私たちは普段授業を受け、本をたくさん読むことで基礎的な知識を得ることが出来ます。しかし、私たちASPIREの活動は人々との交流を通して異なる意見やアイデアを共有することでより知識を増やすことが出来ます。だからこそ私たちは今後ASPIREの活動を通して、他大学、そして海外の学生とも積極的に交流をしていきたいと思っています。最後に、ASPIREの全てのメンバーに感謝を伝えたいです。この総会への準備を通して、私たち自身で成長してきました。中山学長、渡邊信学部長、そして多くの教授方・大学職員の方々が私たちに大変協力してくださいました。そして多くの方々、特に

ASPIREコーディネーターである桜美林大学の山崎慎一先生が困難にぶつかった時には全力で支え、アドバイスを与えてくださいました。私たちの活動を支えてくださるすべての方々にも心より感謝の気持ちを伝えたいと思います。ありがとうございました！

スピーチは不慣れではありませんでしたが私の思いを会場の方々に少しは伝えられたと思っています。この経験を通して、麗澤大学が道徳を授業に取り入れている意味を再確認することが出来ました。麗澤大学在学中にしっかりとモラロジーを学ぶことを決意し、後期より中山学長と井出元学長はじめ補佐のゼミナールを履修しています。現代はインターネットでも検索できる時代ですが、道徳は決して文字だけでは理解できるものではなく人々との関わりによって深められていくものです。学生生活を通して自分自身を成長させながら、ASPIREの活動をより活性化させていきたいと思っています。

〈特集〉人間教育

自信を持つことの大切さ

——I-Lounge SAを通して学んだこと

佐藤 良子
(英語教育専攻修士2年)



平成26年度よりI-Loungeに導入されたStudent Assistant (SA)として、ほかの5名の学生とともに、1年間利用者たちの外国語会話練習のお手伝いをしています。ほとんどの学生が「I-Loungeの敷居は高い」と感じている現状を受け、一人でも多くの学生が気軽に施設を利用できる環境・雰囲気づくりのために、Team I-Loungeが結成されました。私は唯一の大学院生SAで、学習塾や英会話教室での指導経験もあるので、その特徴を生かしたサポートをこなさっています。

私がモットーにしていることは学生たちが自信を持てるように促すことです。たくさんの学生と接す

る中で、何かに取り組む前から諦めていたり、できないと決めつけていたりする人が多いと感じたことがきっかけでした。学部生たちと関わることもできるのも何かの縁だと考え、私は、I-Loungeに来た人が英語に対する自信を持ち、前向きに自主的に学ぶ姿勢を育めればと思いつきながらSAを務めています。自ら限界をつくって、本来の力を発揮することができていないのは、もったいないからです。また、学生たちには、I-Loungeでのコミュニケーション活動を通じて「自信」を身につけてもらい、社会で活躍できる人間になってほしいと考えています。

自信を持たないのはどうしてなのか。学生たちの発言や行動から、私なりに考えてみました。原因は人によって様々だとは思いますが、過去の失敗体験を引きずっている人、完璧主義で小さなミスを許せない人、一つの方法に固執している人、常に他人と比較している人などで、自己評価が低い傾向にあるように感じました。また、やる前から「どうせできないから」と諦めてしまったり、学習に対して消極的で受け身になったりしている人は、悪い結果が出ることばかり考えている傾向がありました。でも実際は、そういう学生たちにもそれぞれの強みや伸びしろがあります。本人が気付いていないだけなのです。そこで私は、I-Loggeでのやりとりの中で、「発音がきれい」「話がわかりやすい」など、学生の長所を伝えるようにしています。学生が一つでも多くの良さや強みに気づき、英語に対する自信を持てるよう心がけています。

では、なぜ自信を持つことが大切なのでしょう。ここでは、例として、私の経験を挙げたいと思

います。

実は私も、SAになることに自信がありませんでした。それを理由に、SAをやるかどうかとても悩みました。英語を使う良い機会にもなり、これまでの講師経験を生かして学習者のサポートをすることができるとは、私にとっても魅力的です。しかし、大学院生生活と両立することや自分の英会話力に自信がなかったのです。そんな私の背中を押してくれたのは、ある先生の言葉でした。

「やってみたらできるよになるんじゃない？」

「何事も経験してみればいいのよ。」

いつの間にか消極的になっていた自分に気付かされました。それも、SAに関してだけでなく、進路選択についても同様であることに……。自分の実力では無理だと思い込み、目指す進路選択をあまり人に話さないようにしていたのです。

実際にSAを始めてみると、自分が思っていたよりも院生生活とのバランスがとれていることに気が付きました。おそらく、研究活動、授業課題、試験

対策、課外活動それぞれに割り当てられる時間に制限があるという意識が高まり、時間の使い方が変わったのでしょうか。正直、自分にそんな力があるとは思っていませんでした。まだまだ効率良く時間を使っているわけでも、完璧に物事をこなせているわけでもありませんが、以前よりもマルチタスクをこなす自信が持てるようになったと思います。また、SA以外の活動においても、より積極的に、より前向きに、より幅広く臨めるようになりました。

もしあの時、自信のなさを理由にSAのポジションを諦めていたら、私は自分自身の能力を過小評価し、新しいことや難しいことにチャレンジする気持ちをなくしていたかもしれません。今でもときどき自信をなくすこともあります。折れそうになった心を持ち直してがんばれるのは、周囲の仲間たちの支えはもちろん、SAになることを決めた勇気が、SAとして、また大学院生としての自信につながったからだと思います。この経験は一例にすぎませんが、私は自信を持つことの大切さを日々とても

強く実感しています。

学生たちの自信を育むために私がしたことは、モデル・ステップでの練習を促すことです。いきなりレベルの高いことをやろうとすると失敗を重ね、自信を失ってしまいます。最初は自己紹介などのとても簡単な会話をして、こちらからの質問レベルを徐々に上げていきます。そして、よくできたことや成長が見られたポイントを伝え、成功体験を積み重ねてもらえるようにしています。こうすることで、新たな課題に取り組む姿勢が育まれ、チャレンジ精神が養われます。また、今達成しやすい小さな目標を立てて取り組むことを覚え、今後の社会人生活でも役に立ててほしいと私は考えています。成功体験を積み重ねていけるので、自信を高めながらステップ・アップできるからです。

自信を持つことは、その人の視野や可能性を広げます。そのことをより多くの学生と共有できるように引き続き取り組んでいこうと思います。

私にとっての国際交流とは？

佐藤智之

(経済学科3年)



私は、今年1年間RIFAの代表を務めました。RIFAとは、麗澤国際交流親睦会 (Reitaku International Friendship Association) という名称の国際交流を目的にしたサークルです。

まずは、今年行った行事や活動について報告したいと思います。毎年行っている留学生の空港出迎えから始まり、キャンパス案内、留学生歓迎懇親会、BBQ、浅草ツアー、RIFA国際交流夏旅行、ハロウィンパーティー、麗陵祭での出店、スポーツ大会、国際交流もちつき大会、クリスマスパーティー、忘年会などです。一つひとつのイベントに40〜50名以上が参加して下さり、多くの人達から、「楽

しかったよ」とか「また参加したい」という言葉を頂いて本当に嬉しい限りです。私は、1年間でいろんな事にチャレンジし、リーダーシップや協働性、自主性などを学ぶことができ、参加して下さった方やRIFAのメンバーに本当に感謝しています。

次に自分がRIFAに入り、代表になり、どう思うかで1年間やってきたかを記そうと思います。私は元々、麗澤大学に入る前から外国人と会話したいと考え、機会がないかとパンフレットを見ていたところ国際交流サークルを見つけ、このサークルに入れば外国人と話せるだろうと思いつきながら見学に行きました。そこで、当時代表だった中国人の女

性から、外国人もたくさんいるからと言われて半信半疑でしたが入会してしまいました。参加しているうちに外国人の友達と、一緒に遊んだり出来るようになり、毎日RIFAのイベントや集まりがあればいいのと思っています。当時の代表にはすごく良くしてもらい、今でもたまに会ったりしています。この人がいなかったら入会もしていなかったかもしれないし、自分が代表になる話も断っていたと思うので、そういう意味ではかなり自分にとって存在が大きかった人でした。そして、サークルに2年間参加した時に、そろそろ交代の時期だから次のRIFAの代表をやってみないかって声をかけられました。直が、即座に「はい」とは言えませんでした。正直かなり他人事のように思えましたし、自分自身、ただ参加して楽しんでる方が楽ですし、代表になったら責任やめんどくさいことなどたくさんでくると思い嫌だなと感じていました。しかし、前代表、前々代表の何度かの説得やRIFAの今までの歴史や熱い思いなどを聞いて、やるなら中途半端に

は出来ないし、自分自身、楽しいサークルを作っていきたいと思い引き受けました。20年以上も続く伝統のあるサークルであり自分の代で潰してはならないし、参加している人が全員楽しんでRIFAに入って良かったと言ってもらいたいと思います。代表になると返事をした時から今日まで、毎日考え試行錯誤の繰り返しでした。

一番大切だと思ったことが、日本人にとっては毎年恒例と思うかもしれないイベントでも、留学生にとっても、留学生にとっても、一度きりのイベントなので、楽しみにしている気持ちや損なってしまうのではないと思いたくありません。そこで、私

恒例の留学生歓迎懇親会



恒例の留学生歓迎懇親会

は1年間という方向でどのようなサークルにして
いこうか、目標をいくつかノートに記しました。R
IFAでは日本にいても様々な言語が学べ、いろん
な国の文化や世界の遊びを学べて、日本人にも外国
人にも双方に意味があるサークルにしたい。メンバ
ーみんなが家族的で、自分の居場所を作れるような
和気あいあいとしたサークルにしたい。留学生には
日本語の勉強が出来る場所であり、一人で来ている
学生もいますので、寂しい思いをさせたくないし、
日本に来て良かったなと思えるようにさせたいし、
させなければいけない。これらの思いをノートに記
し目標をたてました。

1年間の活動の中では何度かメンバーとの意見の
ぶつかりあいもありましたし、予想外な出来事、イ
ベントや毎週火曜日に行っている交流会での成功と
失敗、これらは自分自身の成長に役立ちました。何
とか1年間やってこれましたし、次の代に引き継ぐ

ことも出来ました。

ここで後輩に伝えたいことが2つあります。まず
は何でもやりたいようにやってみる事です。失敗と
思ったら、そこからなぜ失敗してしまったのかをと
ことん考えて、次に活かすことが大事です。私が先
輩から何か新しいチャレンジを行うときは99%失敗
し、そこから人は成長する、本気で挑戦しているの
に、同じ失敗を二度したらそれはチャレンジではな
く無謀だよ、と言われ、どのような状況にも通じる
言葉だなと考えました。

もう一つは常に謙虚でいることです。元来、人間
は平等で上も下もないと思うので、偉そうにせず常
に耳を傾けて学んでいる人間でいてほしいと思いま
す。最後に私にとっての国際交流とは、いろんな人
間に出会いいろんな文化や歴史に触れ、人それぞれ
の考え方や価値観を知り自分のアイデンティティを
形成する場だと思っています。

〈特集〉人間教育

国際交流の現場から

——心のグローバル化を

国際交流グループ主任 柳原佳弘



国際交流業務の中で最も重要な仕事の一つに、建
学の理念にある「世界の人々から信頼される人材の
育成」を具現化することが挙げられます。本学にお
ける多言語・多文化共生、国際的教養人の育成を目
標に、国際交流センターでは海外提携校への留学派
遣、さらに学内においては日本人学生と外国人留学
生が交流できる場を、また学外では地域の方々との
交流の場を設けることに主眼を置いて活動を展開し
ています。

国際交流センターの学内における年間行事は多種
多様です。それらの行事には在学生の協力が欠かせ
ません。一例を挙げますと、新入留学生に対するオ

リエンテーションではRIFA (Reitaku International
Friendship Association=麗澤国際交流親睦会)の皆さ
んや出身国の先輩や留学経験者たちが通訳等に協力
し、日本に到着して間もない留学生がスムーズにキ
ャンパス生活を送れるようにサポートしてくれてい
ます。また、留学生歓迎懇親会や留学生バス一日旅
行、国際交流もつき大会等の国際交流を活性化す
るイベントがあり、英語を母語とするネイティブが
常駐する「Lounge」では外国語によるイベントや留学
生との会話を楽しむチャンスもあり、多くの学生が
参加しています。

地域交流では、周辺の学校からの留学生派遣の要

請に応じ、本学留学生が学校に先生として出向き、国際理解教育に一役買っています。さらに、地域団体と連携したホームステイやホームビジット等で地域の国際化や活性化にも貢献しています。

本学の国際交流活動にとって、RIFAは不可欠な存在であり、麗澤大学におけるシンボルと云って良いのではないのでしょうか。RIFAは麗澤の国際色豊かな特徴を生かして、「留学生と日本人学生との交流を深める機会をつくろう」という目的で誕生しました。

RIFAのルーツは「国際交流もちつき大会」にあります。平成5（1993）年11月16日の「もちつき大会の開催について」という検討書が最初の文書で、同年11月18日には「もちつき大会振興有志の会」として施設使用願が提出されました。それから22年…今ではもちつき大会だけではなく、様々なイベント（バーベキュー・パーティー、スポーツ大会等）を通じて、交流・親睦を深めています。RIFAの学生に話を聞きますと、麗澤で知り合った友人

「球体」を意味するグローブ (globe) が「地球」や「地球儀」を意味するようになり、そこから「地球規模の」という意味でも使われるようになり、さらに「全世界的な」ということを表すようになりました。すでに「グローバル人材」「グローバル教育」のようにそのまま通用するようになっていきます。しかし、「グローバル」は以前の「国際化」に対する



の出身が多国籍であることに驚かされます。そして、RIFAのミーティングや様々なイベントで当たり前のように日本語や外国語でコミュニケーションをとっている姿を見ると、麗澤大学はまさに「小さな地球」だと実感できます。

かつては「国際化」、近年は「グローバル」という言葉が良く使われるようになりました。もともと



「言葉の置き換え」ではなく、何をもって「グローバルなのかを示す必要がある」と思えてなりません。外国語が上手でも「グローバル人材」とは限りません。もちろん、外国語ができるのは良いことです。むしろ、一生懸命やるべきで、間違ったことでもありません。しかし、外国語ができるというのは、コミュニケーションの「道具」を得たことに過ぎず、その先にある人格や心、その人自身が表れるということになります。外国語をスラスラ話せても、信頼を壊す人になってはいけません。

つまり、単に「外国語ができる人」というのはグローバル人材ではないと考えます。なぜならば、外国語はあくまでもその国・地域の人たちとのコミュニケーション手段の一つだからです。全員が外国人であっても日本語ができるのであれば、日本語で話しても良いのですから。

重要なのは、「異なった言語、宗教、文化、価値観等を持った人たちとの間でも、自分自身を見失わずに意見を主張しつつ、一緒になって共通の解決策

について回答を導き出すために調整できること」です。簡単に言うと、どんな人でもやり取りができるということに他なりません。

そのために、外国の歴史や文化・価値観の理解も必要になるでしょうし、自分の心のコントロールもしなければならず、とても大変なことです。グローバル人材とは「異文化間でのコミュニケーション（意思疎通）が取れる人材」ということであり、心のグローバル化こそが本学のミッションだと信じています。

国際交流の分野は今後一層の充実が求められています。地球上のあらゆる人は特別な存在で、同じ地球に生まれた者として、その存在を尊重しながら生きていかなければなりません。麗澤の学生は数多くの外国人（異文化）に出会っていくことでしよう。

そこでは相手に対する尊重の態度を持ち、経験や先入観を捨てて、相手とつながる。『よるこび』を感じ取ってほしいと思います。しかし、それは何も異文化間に限ったことではありません。日本人同士でも、それぞれの境遇は異なりますし、また考え方も、それぞれの境遇は異なりますし、また考え方・興味・価値観等、同じ人は一人として存在しません。私たちこそ「私」と「あなた」が「いま」「ここで」、尊重と理解を持つことが、『グローバル』の第一歩となるのではないのでしょうか。

私たち国際交流センターのスタッフは学生の皆さんに対して、家族の一員のように接していきたい、心の国境がなくなるように祈っています。また、日本人学生・留学生にかかわらず、「日本に来てよかった」「麗澤大学で勉強できてよかった」と感じてもらえるように努力してまいります。

〈特集〉人間教育

対談 就活アドバイザー活動で 伝えたかったこと・得たこと

キャリア支援グループ課長 長谷川善仁

小川香料株式会社 金城明菜

(第65期 日本語学科卒)

長谷川 金城さん、今日は対談のために、休日割いて大学まで来ていただきどうもありがとうございます。久々の母校はどうですか？

金城 景色がだいぶ変わっていて驚きました。学んでいた校舎や学生寮がなくなってしまったのは少しさみしいですが、より環境が良くなっていると感じます。今の麗大生がうらやましいですね。

長谷川 さて今日は主に、金城さんが在学中の4年生の就職活動終了後に取り組んでくれた「就活アドバイザー」での活動の経験についていろいろとお聞きしたいのだけれど、そもそも就活アドバイザーになったきっかけは何だったの？

金城 私は在学中に休学して留学していたため、周りに気軽に相談できる友人がいなかったんです。就活を始めた当時、私自身は就職したいと思う分野をある程度絞ることができていました。ただ、実際にそこに就職するためにはどのような情報を集め、どのような活動をしたらよいのかがわからず、不安な気持ちを抱えて過ごした時期がありました。後輩にはこんな思いをしてほしくないな、と思って、就活アドバイザーになりました。

長谷川 そうだったんだね。当時はそこまで深く理由を聞いていなかった気がするね。もう既に胸が熱くなって来たよ。(笑) 就職活動に慣れている学生

は、誰一人いないからね。いつの時代でも活動前はみんな不安を抱えている。知識もないから、B5C（企業対消費者の取引）の企業しか思い浮かばず、先輩やキャリアセンターの教職員に教えられて視野が広がり、B5B（企業対企業の取引）の企業にも目が向くようになっていくよね。

金城 そのあたりの企業や産業に関する知識も、学生によってバラバラですよ。その不安を解消したり、B5Cの企業にしか目が向いていなかったり、B5Bの企業に興味が深まってきた時に「これ以降はキャリアセンターの人に相談したほうがいいよ」とキャリアセンターの「使い方」を教えたりするのでも就職アドバイザーの役割だと考えていました。

長谷川 学生は就職に関しては、教職員に対してどうしても堅く構えてしまうので、アドバイザーが仲間役をしてくれることは、学生にとっても大学にとっても、本当に有難いね。アドバイザー活動でどんなことが一番印象に残っている？

金城 就職活動に関する相談会です。経験者として

後輩にアドバイスをする、就活アドバイザーの花形のようなイベントであるとともに、きちんと対応できるだろうかと一番気を揉んだイベントでもありました。実際の相談内容は「まだ就活を始めてないけど、何からしたらいいのかわかりません」といったことや「アドバイザーはどのようにならねえのか」というものが多かった気がします。ほかに、「最終的にこの会社に決めた理由」のような質問も多かったですね。個人的には、就活生が自分の就活中や内定までのイメージを得るために、アドバイザーからの情報が役立っていたように感じています。

長谷川 身近な先輩の話の方が学生は気軽に聞きやすいし、マイナビやリクナビなどの就職情報サイトなどの、就職活動では誰もが使わざるを得ないツールは、毎年少しずつ機能が変わるので、そのようなWebサイトをそれほど使わないキャリアセンターの教職員よりも、何か月間も毎日のように利用していた就活アドバイザーのほうが、実は最新の情報を

持っていたり、便利な使い方を知っていたりするしね。おじさんは先端技術に追いつけないときがあります。（笑）

金城 スマホでいつでもネットが見られる今は、私の就活時代よりもスピード感が必要だと思います。

長谷川 卒業まで残り数か月という貴重な時期を、犠牲にしても取り組んだアドバイザー活動を通じて得たことって、どんなことになるんだろう？

金城 「人の話を聞くこと」と「物事の伝え方」です。自分が就職活動をしているときは「自分が主人公」という気持ちで動いていましたが、アドバイザーはあくまでもサポート役なので、主人公である就活生を引き立てるために動きます。就活生の状況は様々なので、その学生にあわせた相談をするため、その子のことを考えながら話を聞き、悩みに応じたアドバイスをしてあげなければいけません。この経験は大きかったですね。

長谷川 なるほど！ それはいまのお仕事（営業職）にも役立つっていいでしょ！

金城 それまでの学生生活では、接点がなかった人たちとの繋がりができたことも、得がたい（収穫）でした。他学部にも所属する人や分野が異なる企業から内定をもらった人たちは、自分とは違う視点を持っていたし、話をしていると自身の視野が広がっていききました。自分にはわからない分野の相談を受け



長谷川さん（左）と金城さん（右）

たら、この人を紹介しようと思える頼れる存在でした。

長谷川 そうやって苦楽をともにしたアドバイザー仲間とは、卒業してからも連絡を取り合っているの？



バドミントンサークルのメンバーで普段使わない筋肉を鍛える
(清水公園のフィールドアスレチックにて、2002年)

金城 SNSで連絡を取り合ったり、OG・OB訪問会で近況を報告しあったりします。直接遣り取りをしなくとも、SNSで「今日は〇〇へ出張に行っています」なんて記事を見て「私も今日一日頑張ろう」と本人の知らないところで勝手に励みにしているときもありますよ。(笑)

長谷川 就活アドバイザーになつてくれる人はみんな献身的。麗澤大学生の良いところを凝縮したような人たちなので、キャリアセンターでも何かと頼りにしています。声をかければ必ず協力してくれるし、機会があるごとに大学へ近況報告や後輩支援に来てくれる。今回もこうやってインタビューに応じてくれているしね。

金城 キャリアセンターが声をかけてくださるイベントに参加することは、母校に貢献できるだけでなく様々な人たちと情報交換ができるので、私自身も有効活用させていただいています。就職してしまふとその道のプロになるため、どうしても偏った情報ばかりに目がいきがちです。イベントに参加するこ

とで他業種、他分野の生の話^{なま}が聞けるのはためになりますし、私自身すごく面白いと思っています。アドバイザー活動がきっかけで先輩・後輩の関係ができていて話もしやすいですね。

長谷川 人脈づくり、という面でも卒業後も役立つているわけだね。そうして築かれた密接な関係性が、後輩の就職活動支援体制を底上げして、支援された後輩たちがまた新しい関係を構築して、さらに次の代へと繋げていく。就活アドバイザーとしての活動は1年間しかないけれども、その精神と絆はずっと続いていくものだよ。

金城 アドバイザーをやったことで、大学への帰属意識もより強くなりましたし、一緒に活動した人たちとの繋がりは今も強固なものがあります。これを糧に、自己研鑽と大学への協力を続けていきたいと思っています。

長谷川 頼もしい言葉ですね。どうもありがとう。まずまずのご活躍を期待しています。次回のOG・OG訪問会で、また会おうね。

就活アドバイザー

「就活アドバイザー」とは、卒業後の進路が決定した4年生の有志が、主に3年生の就職活動をサポートするために結成する学内ボランティア団体である。本学では2004年に20名の4年生によって活動が開始され、その後団体の呼称が変わることはあっても、以来1年も欠くことなくそのスピリットが後輩たちに受け継がれている。歴代アドバイザーの総人数は約300名にのぼる。

「就活アドバイザー」は、毎年キャリアセンターからの募集告知に呼応した学生メンバーで結成される。自身の就職活動の経験をもとに、後輩たちをどのように支援したいかという、メンバー間の議論から活動はスタートする。

前年度のアドバイザーにどのような点で助けられたか、どのような支援が役に立ったかなど、先輩から受けた好影響などが企画のベースとなり、学生メンバー同士で話し合っ活動計画を立案する。

例年、早く就職活動について、何からどのように始めたらよいかわからない3年生の、不安を払拭することに主眼を置いた「相談会」からアドバイザー活動がスタートする。3年生にとっては、極めて心強い先輩集団であることは言うまでもない。その後も主に「相談会」を軸として活動していくが、学生メンバーの就活体験談を冊子にまとめて配布したり、採用選考でのグループディスカッションを体験するワークショップを実施するなど、学生メンバーの主体性や意思に基づいて活動を行う。

一方、キャリアセンターでは、アドバイザー活動を通じた学生の成長を促進すべく、社会人デビューの予行演習と位置づけ、その活動をサポートしている。

NSプロジェクトの活動を通して

飯村精一郎

(英語・英米文化専攻4年)



NSプロジェクトは私が2年生の時から毎年かわってきた活動である。Nは入学式、Sは卒業式の略である。

「入学式プロジェクト」は2012年度に立ち上がり、全学的な歓迎ムードを創出するための企画・立案を学生が主体となつて行い、教職員のサポートのもと実施しているものである。この年からは、卒業式も対象となり、「入学式・卒業式プロジェクト」として学生団体と連携しながらイベントの企画と運営を行つていくプロジェクトである。

入学式では第1部(入学式での式典)の後に実施される第2部の中の「在学生による学生生活の紹

介」の部分を担当し、プログラムの内容の企画立案と当日の運営を行っている。卒業式でも、卒業式の後にかかれる「卒業・修了記念パーティー」の第1部(麗大麗澤会賞授与等)の後に実施される第2部を担当し、入学式同様、そのプログラムの企画と当日の運営を行うものである。

いずれのプログラムも、学生と教職員が協働して進めていくプロジェクトである。入学式も卒業・修了記念パーティーもプログラム時間が決まつていて、その中にいかにうまくイベントを盛り込んでいくかが腕の見せ所だと、私はこれまで2回このプロジェクトに参加して思った。

入学式・卒業式プロジェクトメンバー全員で企画をするのではなく、各チームに分かれ複数回の会議を開いて企画を練つていく。当日の運営は各チームのメンバーのみならず、入学式・卒業式プロジェクトメンバー全員が協力し、それぞれの運営を行つて

いくというものである。

また、入学式においても、卒業・修了パーティーにおいてもメンバーだけでは運営を行うのは不可能で、他の学生やサークル団体、部活動団体、音響・照明委員会の方々などの協力を得ながら、双方のイベントの成功を目指していくのである。

入学式の企画においては、新入生に伝えたいことがたくさんあるが、時間が限られているので、内容を取捨選択していかなければならない。卒業・修了記念パーティーの企画に関しても、入学式でのプログラム同様に与えられている時間がとても短く、取捨選択をしていかなければならず、大変である。

このプロジェクトに参加すると、教育研究支援グループの職員の方々をはじめ、普段の大学生活ではかかわることのない職員に接する機会ができ、また学部や学科、専攻の垣根を飛び越えて面識の無かった先輩や後輩を友人や仲間に行けるといふメリットもある。

私がこのプロジェクトに参加してみようと思った



きっかけは、私が毎日利用しているLoungeで、たまたまこの「入学式・卒業式プロジェクト」の説明会が開かれていたことであった。私は、学外では成田国際空港での空港案内ボランティアのメンバーであり、NPO法人成田空港ボランティアスカイレッツのメンバーでもあり、各々積極的に活動してきたが、学内ではあまり大きなプロジェクト（活動）に参加したことがなかったので、是非、この「入学式・卒業式プロジェクト」に参加しようと思った訳である。今年度（2014年度）で3年目である。

このプロジェクトは授業期間中の昼休みだけでなく、春休みに何日間かは学校に集まり、3月14日の卒業・修了記念パーティーや、4月2日の入学式に向けた企画やリハーサル、運営を行うことがあ

る。授業期間中の昼休みなどといった時間は、授業の予習や復習、テスト対策の時間に充てたい。春休みなどはどこか旅行に行きたい、などといった気持ちを持つ人も少なくないが、その一部の時間を、このような「入学式・卒業式プロジェクト」に充てる。どちらも終わってみると、大きな達成感がある。楽しい大学生活を送るためにも後輩たちには「入学式・卒業式プロジェクト」のみならずいろいろなプロジェクト（活動）に積極的に参加してほしいと思う。参加して損するということは決してない。ですから、少しでも興味があるプロジェクトに参加して、大学生活を充実したものにしてほしいと思う。

〈特集〉 人間教育

学生と職員との協働 「NSプロジェクト」に教えられたこと

図書館事務グループ主任 小生方麻里



私は平成25年度より、学生と職員とで構成する「入学式・卒業式プロジェクト」（以下NSプロジェクト）の一員として入学式と卒業式を製作するプロジェクトに携わっている。以前の入学式は厳粛でスタンダードなものであった。NSプロジェクトは学生

生基点に立ち、新入生の歓迎ムードを高めより印象深いものにする。新入生の不安解消、そして不本意な入学式に対しても、今後の学生生活を前向きにできるように入学式の創出を目標に、平成22年度から発足し活動が続いている。当初は職員のみのものであったが、職員だけでは見出せない学生のアイデアを取り入れるべく、学生有志をメンバーに迎

え、その後は卒業式にも携わり活動の場を広げてきた。

私は本学外国語学部中国語学科の卒業生である。母校である麗澤大学へ入職し図書館に配属され、現在もその図書館で働いている。卒業して随分経つが、何年経過しようとも私は卒業生であり、学生たちはみんな私の後輩である。そのため麗澤大学や学生に対する思いは深く、これは母校で働く者の強みであり、喜びでもある。図書館では窓口対応——有り難いことに日々学生、即ち後輩たちと接しながら仕事をさせて頂いている。そんな立場の私だからこそ勘違いしていたことがある。それは、私にとって

の麗大生のイメージは「図書館の中で出会う」限定された学生のイメージだったことである。図書館という静かで厳肅な場所柄、ここに来る、あるいはここに来ている時の学生の大半は「静」のイメージである。私は、麗大生は「静かで控えめ、どちらかというかと消極的である」という学生像を長年持ち続けていた。しかし図書館で出会う「静」のイメージの学生の中にも、図書館を一步出ると、様々なことにチャレンジしている活発な「動」のイメージの学生が大勢いることに気付いた。プロジェクト学生メンバーと協働することで、私の麗大生に対するイメージが大きく変化したのである。

プロジェクトメンバーになった当初は、わくわくとした気持ちと共に一抹の不安もあった。それは日々学生対応をしているものの、学生との協働は初体験だったからである。また図書館という仕事柄、一つの目標に向け仕事を皆で割り振ったり、任せたりしながら、一緒に何かを達成させていくような働き方が、私には圧倒的に不足していると、自覚

していたこともある。しかしそんな不安は無用だった。何故なら学生メンバーたちは驚くほど積極的かつ自主的だったため、こちらもあれこれ仕事の采配に悩む必要もなく、安心して任せることができたからだ。彼らはとにかく何でもやりたがり、仕事が発生すれば積極的に手を挙げ自主的にこなしてくれるので、職員側は方向性を示し目的の軸がぶれないよう見守るだけでよかった。

感心してしまうのは、これまでNSプロジェクトメンバーに自主的に志願してきた学生は、NSプロジェクト以外にもオーブンキャンパス・スタッフを始め、部活のマネージャー、就活中の学生、卒業を控えた4年生など、既に忙しく活動している学生ばかりなのである。そんな彼らが応募してきた動機は多くは「入学式でNSスタッフとして活躍する先輩たちを見て、自分も是非やってみたいと思った」、「昨年もやったが今年もやりたかった」である。NSプロジェクトが大切に行っているものの一つである「後続の思い」は見事に伝わっていた。彼らが入学

した時に、歓迎し迎え入れてくれた先輩たちがいたからこそ、彼らもまた新入生の気持ちに寄り添って、自分たちの力で式を良いものにしたという信念のもとに頑張っているのである。プロジェクトは大人数のため、学生・職員共にグループに分かれて活動をする。全体会、グループ別ミーティング、更に学生のみでのミーティングもあり、学生たちはかなりの時間を取られることになる。それでも1つのグループでは飽き足らず、2つ以上のグループに自ら手を上げる学生たちのバイタリティーには目を見張るものがある。学生たちは授業を受けながら、器用に日程を調整し、ミーティングに出席して、企画の準備を着々とこなしていくのである。

学生たちと接する際に、私心がけていたことがいくつもある。まず基本的なことだが、挨拶である。一人ひとりへの声かけを大切にしていた。大所帯のため、意識して積極的に関わらなければ、コミュニケーションが浅くなってしまふからだ。一度でも個人的な会話をすることで心理的距離がぐっと近

くなり、お互いに声が掛けやすくなった。また積極的に動くプロデューサー的役割は学生たちに任せ、自分はコーディネーターとしての立場で接することを心がけた。大学職員は元来、学生の大学生活を支えるコーディネーターという役割を担っているところが大きい。プロジェクト内においても、コーディネーターの役割を担った上で、彼らが本番の運営まで行えるよう方向づけ支えつつも、最終的には学生の自主性に委ねるようにしていた。そして最も心がけていたこと、それは答えを職員からは出さず、学生自身に考えてもらえらるようにはしていたことである。信頼して任せることで、学生たちもその期待にしっかりと応えてくれる。任せず答えを与えてしまうと学生の自主性——自ら考えて自ら行動し自ら答えを見出す力——を奪ってしまうことになり、それは学生の成長の機会を奪ってしまうことになる。自分たちで自主的に決断し創りあげていたならば、例えばプロジェクトが失敗に終わっても、それまでの過程で得た学びは大きな財産となり、社会に出ても活か

することができらる。またプロジェクトが成功すれば、大きな自信ともなる。

「答えを与えない」とは、実に奥深いコミュニケーションの方法である。これは図書館業務にも通じるところがある。図書館員は学生に対して、学習課題の答えそのものは決して教えない。答えの探し方・導き方「こんなキーワードを使って検索してみたら」とか「この文献が役に立つのでは？」というように、答えにたどり着くプロセスを援助するに留める。

また私がライフワークとして日々学んでいるカウンセリングについても然りである。カウンセラーは相談者に、そのものずばりの答えを与えることはしない。答えはその人自身にあるという立場で相手を信じているからこそ、対話というコミュニケーションを通して、本人に気付きを得てもらうことができる。カウンセラーがどんなに正しいアドバイスをしたところで、相談者が自分で気付きを得なければ変容はむずかしいのである。答えを与えずプロセスを

援助することには深い意味があり、これは相手さえばこそその選択であると改めて感じた。話がだいぶ広がってしまったが、私が学生と接する際に心がけていたことを一言で言うところ「学生のことを信頼して見守り、成長を促す視点をもって接していた」である。

今回プロジェクトに携わり学生たちと接することで、彼らの在り方は正に、麗澤教育に育まれた学生像・人間像であることに気付いた。他人と関わりを持つときの「思いやり」、自ら考えて行動する「自立」、お世話になった人への「感謝」、人をまとめる「リーダーシップ」を兼ね揃えた彼らは、実に素晴らしい。そんな自分を誇りに思い、NSプロジェクトを始め、多くの事を体験して成長した自分を誇りに思っってほしい。曲がりなりにも、私は麗澤教育を受けた元麗大生である。後輩たちに負けぬよう「思いやり」「自立」「感謝」「リーダーシップ」を今後も様々な経験をしながら培っていかうと思う。

〈特集〉人間教育

学生寮のリーダーを通して

中村由起

(経済学科3年)



「自治…自らを治める／自らが治める」

私が、ユニット・リーダーそしてフロア・リーダーを1年間務め、大きく得たもの・学んだことは、次の2つである。

1つ目は「自らを治める」。これは、一寮生としても学ぶことが出来るものであると考える。例えば、起床時間や就寝(消灯)時間などが全く決められていない麗澤大学の学生寮で、自らが思い描く有意義な大学生活を送るためには、様々な時間を自らで定め行動する必要がある。これに気づくことが出来れば、リーダーとならずとも学ぶ事が出来るだろう。しかし、この1年間で学んだ「自らを治める」

というものには別の要素も加わったと感じる。それは、リーダーとして他の寮生に示しつかない行動は出来ないと考えようになり、生活における一つひとつの行動に責任を感じるようになったということである。

例えば、昨年まではキッチンを使いたい時に使うという状態だった。しかし、この1年間はリーダーとしてキッチンの使い方をユニット内のメンバー等に指導している以上、他の寮生に指導すること以上の使い方をしなければならぬと考えようになった。私は、このようなことも「自らを治める」というものに含まれる要素であると1年間を通して考え

るようになった。

2つ目は「自らが治める」。これは、平成26年度に学生寮の男子議長を務める中で学んだことが非常に大きい。私は、議長として月に一度のユニット・リーダー会議やフロア・リーダー会議を特に重視していた。それは、同じ境遇にいる寮生が一堂に会する場であり、寮生活のあらゆる問題などに対して意見を交換・議論できる最高の場であると考えていたからである。この会議には、男女のユニット・リーダーと教職員の方々を含め60人以上が出席する。そのため、1つの議題に対して複数の意見が出ることもあり、議決に至るまでに多くの時間を要する場合もある。しかし、この1つもしくは2つの結論に至るまでの時間が「自らが治める」というものを考え、学ぶ絶好の機会となったと考えている。寮生活における問題に、ユニット・リーダー全員で向き合うこと。このことを通じ、「自らが治める」ということを意識し生活を送ることが出来たと考える。また、月に一度、ユニット・リーダーが企

画・運営して行う寮イベントを通じても感じることは出来た。普段は、同じユニットのメンバーと過ごすことが多いため、日本人寮生だけでなく留学生とも交流することが出来るという場をリーダーとして作り出す過程などから得るものは大きなものとなった。

次に、次期ユニット・リーダーに伝えたいこととして次の3つを挙げたい。それは、「自己流のリーダーを目指すべし」ということと「問題に正面から向き合うことこそ寮生活である」ということ、更には「他のリーダー等を頼るべし」ということである。1つ目の「自己流のリーダーを目指すべし」というのは、全く先輩方の意見や取り組み方を無視してよいというものではない。しかし、「あの先輩と同じように！」と思いつぎる必要はないということである。確かに、先輩の経験や意見などを取り入れ、目標とすることは重要である。しかし、自らの性格や任せられたユニットの環境などは全く同じであることはないため、先輩方の意見等に固執する必要は

ないと考えるからである。意見や経験は自らの中で取捨選択していく必要があると考える。

2つ目の「問題に正面から向き合うことこそ寮生活である」というのは、麗澤大学の学生寮の代表として出席した千葉県私立大学学生支援研究協議会で、東京基督教大学の男子寮主事の方がお話しされたことでもある。寮で生活していると様々な問題が出てくる。その際に、自らのことだけを考慮して行動したりその場しのぎのような考え方で対処したりすることは解決につながらず、より良い方向に進むことも出来ない。寮を「自らの家」だと捉え、同じユニットのメンバーや他の寮生を「家族」だと捉えて問題に向き合うことでより良い解決策が生まれ、寮生活を楽しむことに繋がると考える。

3つ目の「他のリーダー等を頼るべし」というのは、私がこの1年間で不十分だったことでもある。「問題に正面から向き合うこと」の必要性を述べたが、問題に正面から向き合うことが難しく、苦しいこともある。そのような時に、是非とも他のリーダ

ーを頼って頂きたい。麗澤大学の学生寮には52人（平成26年度）のユニット・リーダーがいる。つまり、同じ想いや悩みを持つリーダーは身近に存在するという事である。この点を上手く活用して頂きたい。必ず、1人では解決することが難しい問題も他のリーダーを頼ることで乗り越えられるものである。最後に、麗澤大学の寮で生活を送ることで、言葉では表現できない喜びや感動、学びを得られるということをこの1年間で深く感じる事が出来た。このような機会を与えて下さった両親をはじめとする家族や教職員の方々、そして先輩方をはじめとする全ての寮生に感謝したい。私は、この感謝の気持ちを忘れず、残りの大学生活を送ります。



自らを治め、自らが治める学生寮

学生支援グループ寮事務室 丸 知里



「様々な経験をさせて頂き、色々な面で成長できました。一言でいうと、楽しかったです。ユニット・リーダーを務めていなかったら、ただ寮に住んでいただけでした。運営する側に立つことにより、寮に対する見方が変わりました。これは今後絶対につながります。そして、リーダーにしか分からないリーダーの気持ちが、分かるようになりました。今期でユニット・リーダーを終える人も、寮をよくしていく気持ちを忘れず、今後も寮運営に協力してください。」

これは、今年度最後のユニット・リーダー会議での女子議長の発言です。51名のユニット・リーダー

と教職員を前に、誇りと自信にあふれ、堂々と話す議長の姿に感動しました。こんなにも素直に、寮生の成長を喜べるのは、学生支援に携わる仕事だからこそ得られる醍醐味です。ましてや寮は、生活の場であり、日々言葉を交わし、日々の小さな変化を近くで感じ、多くの時間を共有していますからその思いはなおさらです。

1年間リーダーを務めた寮生が、自らの経験を振り返り、後輩へと残すメッセージには、成長を感じずにはいられません。多くのリーダーは、「リーダーを務めて、ユニットメンバーのことを考え、ユニット全体が見えるようになりました」と言っていま

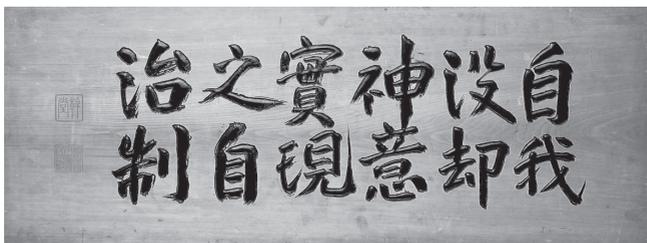
す。フロア・リーダー、さらには役員を務める寮生は、さらに視野が広がります。自分本位でなく、相手の立場で物事を捉え、全体がよくなるために、自分

分はリーダーとして何ができるかを意識しているリーダーが育っています。

リーダーは、まさに「自らを治め」「自らが治める」経験をし、1年間を通じてリーダーになるのだと、実感しています。これは、創立以来、寮の生活信条となつている「自我没却神意実現の自治制」を体現していると思います。私が、寮における「自立」とは何かを考えたとき、脳裏に浮かんだのが玄関前に掲げられている創立者・廣池千九郎の揮毫の掲板です。寮

教育委員会委員長である井出元学長補佐は、寮生活オリエンテーションやユニット・リーダーセミナーで、寮生に向けてこの生活信条を分かりやすく説いてくださいます。「自治」とは、「自分を治める」と「自分が治める」の2つの意味があり、前者は、自己管理を指し、自分を治め、品性を磨くこと、後者は、寮やユニットのルールは自分たちで決め、寮運営をすることであり、寮生活を通して、自らの成長のために努力し訓練していくことが課題であると、お話をされます。

ここで、ユニット・リーダーについて、紹介をします。ユニット・リーダーは、6名で構成されるユニットのリーダーで、寮生の言葉を借りれば「お母さん」のような存在です。事務室やユニット・リーダー会からの連絡事項をメンバーへ伝えるほか、ユニット内の掃除や郵便物・消耗品の受け取りの役割を決めたり、メンバー一人ひとりに気を配り、相談にのったり、課題が生じれば話し合いの場を設けるルールを定めたり、緊急時の対応をしたりと、仕事は



多岐にわたります。

様々な家庭があるように、ユニットにもカラーがあります。ごみ捨てひとつにしても、交代制にするか、ユニット全員で捨てに行くか、構成されるメンバーによって異なりますし、ユニットで定められるルールも様々です。生まれ育った環境も、文化も異なる人と生活をするのですから、時には衝突が起こります。例えば、物音の「うるさい」基準や生活リズムの違いにより、騒音問題へと発展することがあります。夜間の騒音問題が起こったユニットでは、話し合いの結果、「リビングを使用するときは、ドアを閉めること」「23時以降は廊下で立ち話をしない」「24時以降は洗濯機・乾燥機を使わない」などのルールを決め、メンバーの見えるところに掲示しています。リーダーは、ユニット内で衝突や課題が生じたときに、その課題と向き合い、メンバーとの話し合いの場をもち、解決をしていく中心的な存在を担います。

メンバーには留学生もいますから、ゆっくりと簡

単な日本語で連絡事項を伝えたり、掲示物を多言語化するなど工夫したり、様々な言語の挨拶をリビングの壁に掲示しているユニットもあります。ある時、日本語を学び始めたばかりのアメリカからの留学生が体調を崩したときに、語学が堪能なユニット・リーダーが病院へ同行し、通訳を務めたこともありました。

ユニット内の小さなところにも、リーダーの温かい心配りを感じることがあります。玄関にメンバー全員の誕生日を書いて貼っているユニットがあります。このユニットは、今年1年で全員の誕生日会を開くことができたそうです。玄関のドアに「鍵を忘れないように！」と書いてあるユニットは、忘れっぽいメンバーに対する思いやりだなと、母親のような優しさを感じます。

そして、ユニット・リーダーはユニットの枠を超えての活動もあります。それが、月例イベントの企画であり、全員が「主催者側に立つ」経験をしました。今年は52名のユニット・リーダーがグループに

分かれ、年間で必ず1回はイベント企画に携わりました。7月の「たこやきパーティー」では、参加者の一人にナッツアレルギーの寮生がいることを知った担当者は、買出しの際に、食材の表示を一つひとつ見て、ナッツが含まれていないか確認したそうです。12月のクリスマスパーティーの出欠をユニット・リーダーがメンバーに確認するとき、イスラム教の留学生は「クリスマスは異教の会だから、今回は参加できません。他のイベントならば参加できます」と返答され、宗教を問わず誰でも気軽に参加できるイベントを来年度は増やしたいと、言っています。

企画書の作成、買い出し、会場準備、写真撮影など、企画担当者は、参加者に楽しんでもらうために、そして喜んでもらうために、何が出来るかを真剣に考えます。主催者側に立つことにより得た気付きや行動は、今後の生活に大いに役立つでしょう。

ここで挙げたのは、ほんの一例ですが、その他に、ユニット・リーダー会議（出欠確認、次第作

成、会場設営、議事・進行、議事録）、ユニット・リーダーの選出、部屋割、新入生の受け入れ、オリエンテーションやユニット・リーダーセミナーの企画運営は、ユニット・リーダー会が中心となり、主体的に行っています。

「自治制」を目指し、学生の「自立」をサポートしていくことが、寮事務室の職員として重要な仕事だと思えます。私

が、寮生と接する上で心に留めていることは、答えを与えず、思いや考えを聴くこと、そして、信じて任せ、背中をぼんと押すことです。私は、寮生自らが答えを生み出していくプロセスに、そ



つと寄り添い、少々その導くお手伝いをしていくイメージを描いています。寮生が相談に来たときには、どんなことでも、まずとことん話を聴きます。話しているうちに、頭の中が整理できたり、気持ちがつつきりしたり、自然とこれから、まず何をしたらよいかが見えてきたり、寮生自身が何らかの答えを導き出していきます。そして、「だいじょうぶ、これだけ考えたのだから。まずやってみようよ」と背中を押し、「良くも悪くも何か変化が起こったら、報告に来てね。何かあったら、いつでも相談においで」と言葉を添えます。学生には自分で考え、形にする行動力があると、私は信じています。私から答えを出すことで、その芽を摘みたくないと思っています。むしろ、私が考える以上によい考えを、寮生はたくさんもっており、はっとさせられたり、学ぶことの方が多くあります。

今年度も、寮生から多くの相談を受けました。誰もが真剣で、ユニットで今生じている問題から目を反らさず、何とか良くしたい、なんとか解決した

い、という思いを強く抱いています。しかし、時には、生じている問題は把握しつつ、向き合おうとしない寮生もいます。目の前の課題と向きあわせることも、事務室の職員として大切であると思います。「寮生が、成長できた」と言えることが重要で、成長を自覚させることが教育である」と、井出先生がお話をしてくださったことがあります。1年間の締めくくりとしてユニット・リーダーが記入する「振り返りシート」は、リーダーが自らの経験を振り返り、自ら成長を感じる大切な機会であると思います。しかし日々の小さな成長は、自分ではなかなか気付かないものです。今後私は、寮生の成長を見守り、成長の幅を言葉で伝えていきたいと思っています。寮事務室の配属になり、まもなく2年を迎えようとしています。寮生の「自立」に向けてよいサポートができていくのか、自問自答の日々を送っています。この業務を通じて、私自身が多くを学ばせていただいています。学生と共に、悩み、笑い合える身近な職員でありたいと思います。

〈特集〉人間教育

成長の場を与えてくれた「学生アドバイザー」

岡安敬太

(経営学科3年)



学生アドバイザーの活動とは

私にとって学生アドバイザーの活動とは、高校生に麗澤の魅力を伝えることはもちろんのこと、自身の成長の場であると感じている。なぜならば、多くの個性豊かなアドバイザーからはいろいろなことが吸収でき、企画広報室の方からは数多くの挑戦の機会を与えていただけからである。

登録数百名を超える学生アドバイザーには、学部学科を問わず1〜4年生までの学生が登録している。みんな「麗澤大学の魅力を伝えたい」という強い意思を持っていることと、「麗澤大学のことが好

きである」ということに変わりはないが、場を盛り上げるのが上手い人、状況判断が上手い人、話の上手い人、人の相談を親身になって聞ける人など、得意なことは人それぞれ全く違っており、各分野で「プロフェッショナル」として活躍しているのである。毎回のオープンキャンパスは、そんな人たちがらしいものを吸収できる絶好の機会であり、私にとって成長の場となっている。また各回のオープンキャンパスでは、チームリーダー、キャンパスツアーの担当、受付、誘導など多種多様な仕事を振り分けられる。一度経験したことのある仕事を担当することもあるが、毎回何かしら新しい仕事を担当させて

いただけることが多い。新しい仕事は自分にとって未知の世界であり、それを担当する前夜は眠れないぐらい緊張をするが、やりきった時は何ともいえない達成感が得られる。それは自分にとって大きな自信となり、また何かに挑戦したいという気持ちが生まれ、向上心につながっている。この向上心は、学生アドバイザーの活動だけではなく、普段の学生生活や私生活でも生かされており、私の成長を促してくれる活動源のひとつであると感じている。

学生アドバイザーをするに当たって心がけていること

私の成長の場でもある学生アドバイザーの活動であるが、その活動を行うに当たって心がけていることが3つある。

まず1つ目が、「誰のために行っている活動なのかを考えて動く」ということである。同じ目標を持ち、コミュニケーション能力に長けている人が多いせいも、アドバイザー同士非常に仲が良い。そのためか、オープンキャンパス時の空いた時間などで、

おしゃべりをしてしまうことが多い見られる。オープンキャンパスというイベントはあくまでも「高校生」のためのイベントであり、主役は「高校生」なのである。したがって、高校生を交えての会話であれば問題はないが、そうではない場合、高校生や保護者の方に悪いイメージを与えてしまったり、1人で来ている高校生には、「孤独感」を与えてしまう場合もある。実際に自分が高校生の時に麗澤大学のオープンキャンパスに訪れた時も、そういった場面を見かけ、悪い印象を受けた思い出があり、せっかくいいものをもっている学生なのだから、そういった印象を与えてしまうのはもったいないと感じていた。学生アドバイザーとなった今、活動時にそういった場面を見かけた時には、厳しく注意するのではなく、自然と高校生を交えて会話ができるように促すことを心がけている。もしここで部活動のように厳しく注意してしまったら、その人自身のモチベーションも下がってしまう、イキイキと活動できなくなってしまうからである。

また先ほども述べたが、学生アドバイザーは、一人ひとりの能力が高く麗澤が好きだという気持ちが高い学生が多い。それは非常に良いことなのだが、気持ちが強すぎるがためお互いの意見がぶつかったり、時には運営に対して不満を持つこともある。

そういった時にも私は、「誰のために行っている活動なのか」を考え、学生の話を聞き、話し合うことで不満を取り除き、高校生にとってよりよいイベントになるように心がけている。

次に心がけていることは、「リーダーをリーダーだと思わせない」ということである。オープンキャンパスでは、約40名の学生が3つのチームに分かれて活動するので、3年生になつてから、チームリーダーを任

せていただけのようになった。はじめはチームをまとめること、全体を見渡すことなど、慣れないことも多く大変だったが、最近是他のアドバイザーの協力やそれまでの経験から、自信をもって活動できるようになった。その中で心がけていることが、「リーダーをリーダーだと思わせない」ということである。確かにリーダーという役割についてはいるが、チーム一人ひとりの力なしではイベントは成り立たない。だからこそ、上から指示をするのではなく、チームの1人としてアドバイザーそれぞれの良さを引き出すアドバイザーをするような感覚で、指示を出すようにしている。また、積極的にチームメイトに話しかけるようにしたり、場を盛り上げたりして、学生が活動しやすい雰囲気作りも心がけている。これは持論であるが、そういったリーダーの方が協力したいと思ってもらえ、チームもまとまると考えている。



せて3つ目に心がけていることは、「オープンキャンパスはあくまでも仕事」であるということである。

ある。オープンキャンパスの活動は楽しく、人脈を広げることでもできる自分の成長の場でもある。しかし、人脈を広げることや成長を目的とした活動だったら、サークル活動や部活動でもいいことだが、それらと違う点は、「大学PR役」という責任が伴う、ということ、そこには「成果」が求められる。オープンキャンパスという成果は、「高校生の満足度」なのではないかと私は思う。だから、その満足度を高める工夫を、失敗と成功を繰り返しながら自分自身で行い、教職員のみなさんや他のアドバイザーの仲間とより良いオープンキャンパスを作り上げていくことが、私たちの「仕事」なのではないかと思う。

先輩から受け継ぎ、後輩に伝えたいこと

私が学生アドバイザーの活動を行うに当たって、心がけていること3つをあげたが、これらがはじめからできたわけではない。多くの失敗を乗り越えたり、いろいろな苦悩を先輩や企画広報室の職員の方

に相談して自分なりの答えを出してはじめて心がけるようになったことばかりである。確かにアドバイザーは仕事であるが、学生らしく、楽しみつつ失敗を恐れず取り組みたいと思う。麗澤大学の良さは、学生同士、学生・職員間の距離が近いことなので、失敗して悩んだり壁にぶつかった時には、先輩や経験者に相談すればいいと思う。そうやって成長していくことで、自分の納得のいく活動ができるようになるのではないかと思う。

最後になるが、後輩には活動を通してどんな時でも相手のことを考えた行動をして欲しい。それはアドバイザー同士のことはもちろんのこと、来てくれた高校生に対してもそうである。高校生の中には、麗澤大学が第1志望ではない人もいるだろう。その時に無理やり麗澤を勧めるのではなく、相手の気持ちを考えて行動してほしい。そういった姿勢こそが、麗澤大学の魅力を伝える一番のPRではないかと、私は思う。

〈特集〉人間教育

学生アドバイザーで培った経験を知識に

企画広報室 西野 遥



私は、学生アドバイザーの活動は〈社会に出る予行演習の場〉〈自分自身を成長させる場〉にして欲しいと考えている。最初は、「たくさん友達を作りたい」「先輩に話を聞いて楽しそうだった」という理由で学生アドバイザーを希望した学生は多いと思う。オープンキャンパスや個別見学会などのイベントを楽しんでもらうことは良いことだ。どんどん、盛り上げていって欲しい。しかし、学生アドバイザーたちには、それだけで終わらせて欲しくはないのである。私が彼らに望むことは、大きくは次の三つである。

一つ目は、自ら考え行動することである。学生ア

ドバイザーの主な活動であるオープンキャンパスでは、一人ひとりに役割を与え、誰一人として1日を通して同じ作業をする者はいない。分刻みのスケジュールで動く中で、予期せぬ事態が起きることがよくある。そういった時でも、冷静にどうすることが一番良いのかをアドバイザー同士で話し合い、解決まで導いて欲しい。だから、私は彼らに、「どうしましょう」という自分の意見や考えが全くない言葉は使わずに、「○○なので××したいのですが、よろしいでしょうか」という言い方をするよう指導している。そして、どんな状況になっても私がちゃんと責任を取るから、失敗を恐れずに対応して欲しい

と伝えている。それだけ私は彼らが持つ力を信じているし、彼らを頼りにしているからだ。そして何より、彼らならそれが出来ると思っっているからである。

二つ目は、仕事をする事について考える機会にして欲しいということ。先にも述べたように、彼らにはそれぞれに役割を与え活動してもらっている。それは毎回同じわけではなく、経験の有無に関わらず新しい仕事を任せることなど日常茶飯事である。もちろんその役割には向き不向きもあれば、彼らの好き嫌いもある。私はそれを把握した上で、新しい役割に挑戦してもらっている。それが彼らの「仕事」であり、また、新しいことに挑戦すること成長し、自信を持ってもらいたいからである。

ここで少し私の前職について……

以前、私は人材派遣のコーディネーターの仕事をしていたことがある。営業に始まり、派遣スタッフの登録対応、勤怠管理、給与管理、新卒採用対応など仕事内容は多岐にわたっており、総合職採用だったため、勤務地も郡山・福島・千葉・滋賀と転々と

していた。

当初は、営業のノウハウなど全くなく、まだ20歳そこそこの若造ということでバカにされたこともあり、また、自分の親世代の派遣スタッフに注意をしようものなら、ちゃんと働いたこともない子にとにかく言われたくないと怒鳴られたこともある。

それでもひたすら足を運び関係作りに努めた結果、入社半年で営業トップとなり、1年も経たずに100名近いスタッフの管理を任せられ、チームリーダーとして部下を管理する立場になった。ここに至るまでには悔しくて泣いたことが何度もあったが、自分の頑張りが結果として目に見えてきたとき、初めてうれし涙を流したことを今でもはっきり覚えている。そして、何より印象に残っているのは、私の結果に対して上司が「頑張ったね。おめでとう！」と言って涙を流してくれたことである。

学生のほとんどは、大学を卒業したら社会に出る。そこには、彼らがこれまでに経験したこともないような困難が多く待ち受けているに違いない。好

きでもない仕事をやらされたり、思いもよらないことでクレームを受けたり、なかなか成果が出せなかったり……。そのような時でも悲観せずに前を向いて進んでいて欲しい。なぜなら、そのような時こそが成長するチャンスであり、周りもその成長を期待しているからである。

そして、三つ目は、自ら経験し学んだことをしっかりと共有し、残して欲しいということである。彼らはまだ人を育てたり、誰かを指導するということに慣れていない。だから、あえて私は、学生アドバイザーに手取り足取り一から仕事を教えるということはせず、新人や後輩の指導は彼ら自身にお願いしている。やり方は十人十色で、彼らが考えている。一から丁寧に教える者がいれば、見て覚えろと言わんばかりに態度で示す者もいる。自分たちが先輩から教わったことを後輩に伝えていくことが学

生アドバイザーの伝統であり、彼らもそのことを理解しているからこそ、教育担当など決めなくても、上級生が動いてくれている。時には後輩から煙たがれることがあるかもしれないが、ちゃんと一人ひとりと向き合い、自分たちの思いを伝えて欲しい。そして、後輩たちも先輩の思いを感じて真摯に受け止め成長に繋げて欲しいと思う。

これらは学生アドバイザーに望むことではあるが、実は、私自身にも言えることである。私も仕事を通し彼らと関わることで成長していきたくいし、彼らに伝えられることがある限り伝えていきたい。そうやって、切磋琢磨しあいながら成長していったら、本当に素晴らしい関係だと言えるのではないだろうか。これからも、彼らの成長を願い、見守り、支えていける職員でありたい。これが今の私の、彼らに対する思いである。

おもてなし..ホスピタリティープロジェクト

掛江 佑奈

(英語・英米文化専攻1年)



「おもてなし」と聞いて、あなたは何を思い浮かべるでしょうか。国際オリンピックでの滝川クリステルさんの言葉でしょうか。昨年の夏、友達のひとつ言がきっかけで、ホスピタリティープロジェクトに参加することになりました。おもてなしの心で外国人観光客に道案内や手助けをするボランティアをやらなかつたかと誘われ、「楽しそう」という思いで、即参加を決めた私でしたが、なによりも「外国人観光客と会話ができる」「コミュニケーションが取れる」ということに期待と楽しみという気持ちでいっぱいだったのを覚えています。

ホスピタリティープロジェクトとは、地藏や忍者

のおもてなしTシャツを着て、外国人観光客の方々におもてなしをするというものです。私は全3回のうち2回目の浅草と、3回目の上野でのホスピタリティープロジェクトに参加しました。もちろん、どちらも観光地として有名で外国人観光客も多い、人気のスポットです。そこで私たちは、いくつかのグループに分かれ、活動しました。そこで感じた3つのことをお話ししたいと思います。

まず、初めのうちは「外国人観光客に話しかける」ということが、なかなかできなかったということです。普段、日常生活の中で、どうやって話しかけようか、どんな話をしようかなどと考えることはありますが、話しかける行為そのものに対して抵抗はありませんでした。しかし、外国人となると言語や文化の違いを頭の隅で意識して、「今話しかけたら迷惑なのではないだろうか」「話しているのです、今は話しかけることを控えよう」などと考えてしまい、なかなか行動できずにただ見守っているだけでした。もちろん、外国人を初めて目にしたわけでもなく、また海外経験がないわけでもありません。なぜでしょうか。海外にいるときと日本にいるときとは感覚が違うのです。「写真、撮ってあげましょうか」と話しかけてみるのもいいのでは、とアドバ

イスをもらい実践してみるものの会話が弾まず、そこで話が終わってしまうことも幾度かありました。それから何度も話しかけ、おもてなしをしていく中で、ただの道案内や手助けだけでなく、楽しく会話もできるようになりました。

このように活動をしていく中で感じた2つ目のことは、自国を改めて知ることです。有名な観光地だから、聞かれることで知らないことはないだ

ろうと買い被っていました。驚いたことに、外国人の方々には、私たちが考えるような観光地は、当然知っており、彼らが知りたかったことは、私たちでも知らないようなことでした。その一つとして、こんな会話がありました。「おでんのお店は、どこ？」と聞いてくるのです。今となつては、お店の名前はすぐに思い浮かぶのですが、その時は全く思い浮かばず、一緒に探しました。私自身、おでんのお店、つまり、おでん専門店のようなお店があるということすら知らなかったのです。改めて自国を知りたい機会になりました。

もう一つは、外国人に話しかけるにあたり、様々な反応の違いに驚いたということです。「写真をお撮りしましょうか」とひと言声をかけられたとき、私たちは、どう反応するでしょうか。「ありがとう」と感謝の言葉をかけながら、カメラを渡すと答える人が多いのではないのでしょうか。しかし外国人観光客の中には、「お金は、かかる？」という質問をしてくる人もいました。やはり文化の違いなの



か、様々な反応があり少し戸惑うこともありました。

海外では自然に「写真をお撮りしましょうか」と話しかけ撮ってあげたり、自分自身も一緒に撮影に参加したりして、お金を取るような行為が、

実際あるそうです。それだけでなく、「道案内しましょうか」と言っただけでなく、「道案内しませんが、金品を盗むということもあるようです。このことを考えるとそのような反応も無理もないように思われます。私たちの活動もそのように思われてしまったのではないのでしょうか。英語で話しかけることで、より疑ってしまうのではという意見があり、最初のひと言目は、日本語で話しかけるといことを心がけ

てみました。ひと言話すだけでもいろいろな文化の違いや考えの違いなどがわかり、とても興味深く面白かったです。

ホスピタリティプロジェクトでは、外国人観光客の方々におもてなしをすると同時に、日本のこともよりよく知ることのできるプロジェクトです。いつの間にか、ただ話をしたい、コミュニケーションを取りたいという思いではなく、日本のことをもっともっと知ってもらいたい、日本をもっと好きになってももらいたい、そんな思いを抱き、おもてなしをしている自分がいました。

このプロジェクトの活動をしていく中で一番大切なことは、やりたい、やるうという気持ちと行動力だと実感しました。日本にいなながら、異文化を感じられる素敵な時間を過ごすことができました。皆さんもおもてなしTシャツを着て、一緒におもてなしをしてみませんか。

〈特集〉人間教育

ホス。ピタリTシャツがくれたきっかけ

（英語コミュニケーション専攻2年）
小林 湧



2020年、東京では56年ぶりに2度目のオリンピックを開催しようとしています。日本にはある課題があります。2014年2月に日本経済新聞社が発行している、日本の流行に特化した専門誌「日

経MJ」によると、訪日外国人1000人を対象に、おもてなし文化の日本における残念なところを調査し、回答の多くは次のようなものでした。「外国語を話してくれる人が少ない」。私は現在、この大学で英語を学んでいます。その学びを日常生活に活かしているのかと聞かれたら、自信を持って「はい」とは言えません。この「ホスピタリティプロジェクト」を担当する田中俊弘先生の「英語圏

地域研究入門」の授業がきっかけでこのことを知り、道行く先々で外国人を多く見かけるようになった現在、自ら進んで会話する勇気を身に付けたいと思い参加しました。

多くの外国人が「困った」問題について、なぜ、日本人⇨英語が話せない民族となってしまったのでしょうか。英語の文法と日本語の文法は確かに異なるので、覚えるのは難しいと思います。個人差はありますが、中学校に入学した時から最低でも3年間は英語を学んできているので、多少の受け答えなら日本人でもできるはず。ある日私が中学生の頃、空港方面行きの電車に乗っていたら、私が座る

向かい側の席に、心配そうな顔をして辺りを見回している一人の外国人がいました。彼はその時、重たそうなスーツケースを押さえながら、電車の進行方向を指さし、私にこう尋ねました。「Airport?」。彼はこの電車が空港行きなのか、そうでないのかがずっと気になっていたのでしょうか。私はその頃、あまり英会話には自信がなかったもので、ただひと言「Yes」としか答えることできませんでした。疑問が解けたことに安堵したのか、この会話ひとつでさつきまで心配そうにキョロキョロしていた顔が、ウソであるかのように落ち着きを取り戻してしまいました。先ほどの会話で使われた単語はたった2つだけです。「Airport」と「Yes」。これらは全て中学校1年生あたりに習う単語でしょう。完璧に話せることを理想と夢見るばかりに、少しだけ話せるのに話せないと言ってしまうことが、かえって訪日外国人の「困った」につながってしまうのです。遠慮しがちなある日本人の性^{さが}が出てしまっているのでしょうか。当時の私の見た目から、私はあまり英語ができ

ないと思われたのか、指をさして空港の方向を聞くことで、言語上では「空港?」としか聞いていないことも、非言語上では「空港はこの方向で合っていますか」と理解してもらえようにしたのでしょうか。もし、外国人から尋ねられたり、または困っていないような彼らを見かけたら、声をかけてあげたり、簡単に回答するだけでもその人たちの助けにつながります。もし、この時、自分が空港の場所がわからなかったら、周りにいる人たちに頼りましょう。今までの経験を通じて、私が考えるこのホスピタリティープロジェクトは、完璧に英語は話せないけれども、困っている人を見たら助けてあげたい。そういう世話焼き好きな性格を活かせる活動の一つだと考えます。そういった人たちが増えることで、外国人が直面する問題を解決することにもつながります。ホスピタリティープロジェクトは、これまで(2015年1月現在)、3回ほど活動を行ってきました。グループを作り、道行く外国人との交流などを楽しみながら活動してきましたが、交流を図ること

で多くのことを学びました。その一つは、様々な方向に視野を広げながら案内をしないといけないということです。例えば、2回目の活動を浅草で行っていた時、電車で困っていた外国人を見かけ、声をかけたときにスマートフォン画面を表示してきて「この順序で行きたい」と言われました。画面には乗換案内が映っており、浅草から新宿までの案内が出ていました。乗換回数を優先しすぎているのか、浅草駅から乗換駅として指定されていない浅草橋駅から総武線に乗り、乗換なしで行くルートになっていました。ナビでルートを検索したところ、浅草から浅草橋まで徒歩で約二十分以上もかかり、日本の地理にも慣れていない外国人からしたら、それはあまりにも酷であると思います、私はできるだけ乗換を減らし新宿駅までのルートに手直ししてあげました。英語版路線図が必要だと思ひ、駅の窓口で駅員さんに尋ねたところ、日本語版しかないと言われ、仕方

なくそれしてもらい、その図にペンで書き込みながら、案内してあげました。駅の窓口には英語版路線図が当然あるものだと過信していたため、無かった時の回避策や、それを踏まえた上での案内が必要になります。当たり前だと思ひ込んでいたことが、実は当たり前ではなかったのです。この活動を通じて、私はロボットにはない、柔軟に対応できる力をも身に着けることができました。

5年後には、東京で再びオリピックが開催されるようとしており、外国人観光客も安心して日本に來るためには、外国語が話せる人材が不可欠で、このホスピタリティープロジェクトは、そういった壁を壊すのに一役買ってくれることでしょう。この活動は本学学生以外の一般人の方々も参加できますので、これからも積極的に参加し、多くの人々と交流を図っていききたいです。

ホス。ピタリTシャツで「お・も・て・な・し」

外国語学部教授 田中俊弘



困っている外国人を見かけても、助けてあげたいのになかなかそれができない。そんな経験をした人は、麗澤の学生にも少なくないはずだ。私たち日本人は、「おもてなし」精神に溢れていると思うけれど、見知らぬ外国人に声をかけるのに二の足を踏むことは、おそらく少なくない。それは、外国語を多少かじっていたところで、さほど大差はない。

2020年の東京オリンピック開催に向けて、外国人観光客をどう迎えられるかが、国や地方自治体レベルでも議論されている。オリンピックに限らず、観光立国を目指す日本で、外国人が気楽に街歩きを楽しみ、道を尋ねられる環境は、どうすれば作

れるのだろうか。皆が真剣に悩んでいる最中だ。

実は、それについて面白いアイデアがある。「あなたの国の言語でお手伝いできますよ」と書かれたTシャツを「普段着」として身につけた一般ボランティアが、街中に溢れていたらどうだろう。それぞれの言語で尻込みせずに対応してくれる日本人を、その着ている服や身につけている物で識別できたら、観光客にも安心かつ快適な環境が作れるのではないだろうか。ボランティアをする側も、どこかの組織に登録して予約を受ける体制も重要だが、普通に生活していて、自分の用事を済ませるついでに、声をかけられればお手伝いするくらいのスタン

スの方が、気楽に活動できるのではないか。——昨年6月末、麗澤高校の私の4期先輩であるディノス・セシールの小柴孝之さんから、大学の企画広報室に新しいプロジェクトのアイデアに関する打診があった。外国語を重視し、モラルやホスピタリティを重んじる麗澤大学だからこそ、一緒に関わられる企画ではないかというお話で、経済学部の吉田健一郎先生や職員とプレゼンを拝聴したのが7月初めであった。

発案者のひとり、フジテレビ構成作家の畔柳賢朗さんは、すでに自前でTシャツを作り、上野辺りで外国人に声をかけて歩き、かなりの手応えをつかんでいたのだという。……こんな面白い話に乗らない手はない。さっそく学生に掲示や学内SNS（通称グリコミ）、授業等で周知して、昼休みに説明会を取り急ぎ2度行なった。他の行事も重なる時間帯だったにもかかわらず、想定していた以上に多くの学生が足を運んでくれたし、来られないけれど資料が欲しいと連絡してきた学生が何人もいて、す

にこの段階から成功の予感がしていた。7月半ばから期末試験週間にかけて、Tシャツの英文についても学生のアイデアを募集し、外国人教員も巻き込んで、「少し崩しているけれども変ではない英文」の入ったTシャツのデザインが急ピッチで決まった。ちなみに忍者と地蔵のキャラクターは、フジテレビで題字などを手がけているスゴい方が、手弁当で作ったのだとか。夏休みに実施するならば、学生が大学にいるうちに話を進めなければならぬので、大慌てのやり取りが必要となり、7月中は準備が大変だったが、グリコミを通して情報周知や日程などの詳細を決定する仕組みを整えて夏休みを迎えることができた。

こうして記念すべき第1回目は、8月19日の浅草において、総勢30名程度で実施された。雷門前の浅草文化観光センターに控え室を取り、そこで事前打ち合せをした後に、センター前で最初の集合写真を撮った。そこから数名ずつのグループに分かれて、それぞれが日本語と英語の地図を手にして、思い思

いに行き先を決めて四方に散っていった。

浅草は、外国人旅行者が本場に多い街である。そして、各駅から浅草寺までの行き方が（やや）わかりにくいために、駅周辺で迷っている外国人をしばしば見かける。あるいは、雷門前を筆頭に、撮影スポットが多いので、その辺りで「写真を撮りましょうか？」と声をかければ、それが英会話のきっかけになる。…と、後からは気楽に書けるけれど、いざ開始するまでは、私自身もそれなりに緊張していたのを告白しなければならぬ。何しろ、そもそも浅草の街をほとんど知らなかったのだ。ある程度土地勘がある妻と一緒に参加したが、東武の駅を出たところで、「浅草寺はこっちだよな？」と見当違いの方向を指差してすっかり呆れられた。外国人ではなくても迷うものは迷う。男でも地図を読めない人はいる。しかし、誰かを案内するつもりで地図を見ながら歩き回り、駅を含めていくつかポイントになる場所を確認していけば、徐々に不安が収まってくる。自分がわからなくても誰か仲間に聞けば良い。

誰もわからなければインターネットで調べるか、周りの人に聞けば良い。実際、美味しいラーメン屋の情報はある学生から教わったし、聞かれたホテルの場所はネットで確認した。案内しながら、通ったことのない路地で面白そうな雑貨店を発見してひやかしたりもした。ひよつとすると、この活動は、誰よりも自分自身が街を発見・再発見するのに最適なのもかもしれない。

多くの参加者にとって、観光客への第一声を発するのが何よりも大変である。しかし、最初は見知らぬ外国人になかなか勇気を出して話しかけられずいた学生も、1人、2人と声をかければ、それが大きな自信になる。昼の反省会の段階では、まだほとんど声をかけられていないんですと言っていた学生も、午後の部が終了する頃には、何度かトライできて楽しかったと、嬉しそうな顔で報告していた。そう、やればできるのだ。このボランティア活動に参加すること自体が、そのような勇気を与えてくれる。着ているTシャツに背中を押されるのだ。そし

て、外国人の嬉しそうな反応を得られれば、報われた気持ちになる。英語で人の役に立てた楽しさ、相手に喜んでもらえた嬉しさは格別であろう。

もちろんうまくいかないこともある。そもそも、Tシャツを着ているからというだけで、向こうから声をかけてくれるとはかぎらない。突然声をかけられて驚き、何か有料のサービスではないかとうさん臭そうにみられる場合さえある。せっかくの善意の申し出を断られれば、なんとなく哀しくなるし、相手が何を言っているかわからなくて困った人もいるだろう。しかし、それも含めて全てが経験である。

この種の活動のすごいところは、たったの数時間で、人が目に見えて成長する点だ。残念ながら、教室ではこうはいかない。朝と夕方の顔がこんな風に違うのは、実地体験ゆえであろう。キラキラしている学生を見られるのはとても楽しくて、それがこの企画を続けていけると確信できた瞬間だった。

実際、初回実験（アクト）は学生達にも高く評価されたようで、口コミでグリコミのコミュニティ参

加者が増えた。そして、夏休み終わり直前の9月17日に開催した第2回アクトは、さらに多くの参加者を得た。今回も「勝手知ったる」浅草で実施したので、さすがの私も、駅から集合場所まで迷わずに着てきた。知っている場所での活動は、安心感が違う。この回は、LA帰りの俳優・相澤優樹さんも一緒で、また、産経新聞の記者も同行取材してくれた（翌日の産経新聞朝刊や各種インターネットニュースで、活動をご紹介いただいた）。テレビ番組の撮影もしている映像制作会社のカメラマンもボランティアで大きな撮影カメラを抱えて参加して下さった。その映像は編



集されて大学ホームページの「動画で見る麗澤大学」にアップされているので、まだご覧になっていない方は是非ご覧いただきたい。(Hospitality-Tree Project <<https://www.youtube.com/watch?v=Novu-KebzE>>)

やや間が空いて、第3回目のアクトは、11月30日に上野公園で実施した。教職員や一般参加者を含めて、過去最多の50名以上がボランティアに加わった。浅草の仲見世通りに比べれば、上野公園は広々としていて、外国人観光客の数もそれほど多くは多くなかった。しかし、その分ゆったりと歩いている観光客が、「お手伝いしましょうか」という学生達の声かけに足を止めて長い時間雑談する光景もちらほら見かけた。

ただ、上野の外国人は、あまり困っていない印象でもあった。私のグループは、午後は動物園内に入ったのだが、各言語で用意された案内パンフレットを手に、外国人観光客も思い思いに楽しそうに園内を楽しんでおり、声をかける余地がないように感じ

の他にも、篠藤涼子先生、アンドリュウ・マクノートン先生、小葉哲哉先生がすでに参加している。中国や台湾からの留学生もこのイベントに加わってくださっているのが嬉しい。学長や両学部長からのご支援もいただき、他の教職員からも応援の声を多数いただいている。とりあえず目標にしていた3回のアクトを無事に終えたが、グリコミのコミュニティ登録者はその後も増え続け、1月半ばの段階で、すでに120名に近づいている。「田中先生、次はいつ実施するんですか?」「次も/次は絶対参加します!」と声をかけてくる学生も少なくない。周辺の大学や高校からも参加希望の声が出ている。新年度も、他の教職員も巻き込んで、ホスピタリTがますます活発になっていきそうである。麗澤大学発のプロジェクトが、いつの間にか巷に広がり、東京オリピックの頃には、そんな原点を知らない人達が、「英語で」「ドイツ語で」「中国語で」「スペイン語で」「フランス語で」「韓国語で」「イタリア語で」

られた。そこに長居してもボランティア活動にならない気がして、我々は早々に動物園を後にする決断をしたのだが、頼もしいことに、そこでも頑張っている学生達がいた。園を出る直前に会った1年生男子ばかりのグループに、園内には声をかけるような外国人があまりいなかったねと話しかけたところ、そんなことはない、たくさん外国人に話しかけられてとても楽しいという答えが返ってきたのである。相手が困っているかどうかはともかく、外国人を見つけたら積極的に話しかける方針で、彼らは皆に声をかけて回ったらしい。素晴らしい。しかも、そんな学生は彼らに限らない。私はホスピタリTの引率者のひとりになっているが、私よりもよほどコミュニケーション力の高い、そしてこの活動の楽しみ方を理解している学生が何人もいるのは頼もしいし、そういう学生が、ホスピタリTに限らず、今後とも麗澤大学を盛り上げて欲しいと思う。

もはや、ホスピタリTは大学ぐるみのプロジェクトへと進化しつつある。教員では、吉田先生や田中などなど、各言語で「何かあったら助けられる」オーラを身に纏いながら、このTシャツを着て歩き回るようになっていたらと想像するだけで楽しい。

しかしそれよりも重要なのは、このプロジェクトが学生にとって素晴らしい異文化体験になっている点である。疑似留学といえば言い過ぎなのは承知しているが、お金を払わずに見知らぬ人と外国語で話す機会を提供できているのだ。そして我々教職員は、学生が成長する現場に立ち会えるのである。

2015年度は、どんな形でホスピタリTを展開していこうか。目下、吉田先生や小柴さんを筆頭に学内外の関係者と検討中である。それがどんな形になるにせよ、ますます多くの学生が、ホスピタリTに参加してくれることを祈念している。もちろん、他の教職員や卒業生の参加も大歓迎である。その節は、吉田先生か田中まで、是非お声がけいただきたい。

「心」が大事く成田歩きを経て

渡邊陽介

(英語・英米文化専攻4年)



「成田歩き」とは、麗澤大学から成田市にある成田山新勝寺まで歩くというイベントです。私が1年生の時から、3年越しの開催ということで、後輩たちに経験してほしい、引き継いでほしいという思いから今年リーダーを務めました。私にとって「成田歩き」とは、50キロを歩くだけの場ではなく、心を成長させる場でもあります。夜通し歩くことによって心身共に疲労した状況で人はどういう行動をとるのか、果たして相手を気遣うことができるのか、様々な壁がある中でそれを乗り越え歩いていくことが「成田歩き」の目的であると考えています。2014年9月16日21時、曇り空が気になる中、

男子寮生13名の「成田歩き」がスタートしました。曇り空はまるで参加者全員の気持ちを表しているかの様でした。これから15時間歩き続けるというのは考えただけで嫌になります。入念に準備運動をこなして、全員で士気を高め、出発しました。「先頭を歩く」ということは自分が思った以上に責任重大な役割でした。自分のペースで歩くことができないからです。周りの状況を確認しながら、時には声を掛け歩くことが自分の中で一番大変でした。道中では、複数で話しながら歩くことを徹底させました。複数で話しながら歩くことで疲れを忘れることができ、またその時話したことや起こった出来事を後で思い

出して欲しかったからです。さらにこういう場面で人はどのように相手を気遣うことができるのか「心」が成長する場面でもあるからです。

17日午前11時頃に成田山新勝寺に参加者全員でゴールしました。険しい道のりを乗り越え、歩き切ったみんなは、出発の時とは比べものにならない程、清々しい表情をしていました。そして最後に参加者全員の「成田歩き」の活力の8割を占めるといっても過言ではない成田名物の鰻を食べに行きました。達成感を感じながらの鰻は最高に美味しかったです。ですが、食べ終わった後すぐに全員が眠りについていました。

「成田歩き」をしたことで、私が第一に思ったことは「感謝」でした。そう思うことができた要因の根本には教職員の方々の協力がありました。教職員の協力なしでは、成功しうることはなかったと思います。企画段階から全面的にサポートしていただき、何不自由なく当日を迎えることができました。また、当日には長い道のりを歩いて心身ともに疲れて

いる中、教職員の方々の差し入れは「成田歩き」をゴールする上でとても励みになりました。教職員のサポートなしでは成田まで歩くことは不可能だったと思います。

また、「感謝」の意は学生にも向けられています。まず、参加してくれたことに対して「ありがとうございます」と伝えたいです。3年越しの開催なので初めは



とても不安でした。50キロ歩くことを勧められたら普通は参加しないと思います。そんな中12人ものメンバーが集まりました。参加したいけど予定が合わないと悔しがつている人や参加予定だったのに体調不良で残念ながら参加できなかった人など、多くの人から参加依頼がありました。多くの反響があり、「成田歩き」を企画した甲斐がありました。参加メンバーには最後まで楽しんで歩いてもらったり、時には元気づけてもらったりと何度も助けてもらいました。「成田歩き」に関わってくれた人全員に本当に感謝の意を伝えたいです。

「成田歩き」をする上で私には個人的な目標がありました。それは、参加者全員に何不自由なく歩いてもらうことでした。休憩する時間や歩くスピード、歩くルートの正確さなど気に掛けることがとにかくたくさんありました。ルートに関しては、1度しか下見に行くタイミングがなかったので目印になる場

所の写真を撮ったり、休憩場所を入念にチェックしたり、当日自分が先頭を歩いた時困らないように時間をかけてシミュレーションしました。ゴールした時、参加者の清々しい表情を見た瞬間、自分の目標は達成できたと痛感しました。

「成田歩き」は、自分自身への挑戦、心身ともに限界になった時の言動という壁にぶつかります。「成田歩き」を経てどれだけ自分達が成長できたのかは分かりません。ですが、道中で参加者同士助けあう場面が多く見受けられました。この「成田歩き」を通して自分を含め参加者全員が成長していると実感することができました。大学生活の中でこのような経験ができることはそうありません。「成田歩き」はとても多くの意味を持った行事だと思います。参加者の多くは、来年度以降も在学中の人ばかりなので、是非、「成田歩き」という伝統を引き継いでほしいと思います。

◇学生基点にたった「自主企画ゼミナール」とは

学長・学長補佐ゼミで学んだこと

今木 崇雄

(日本語・国際コミュニケーション専攻3年)



私が学長・学長補佐ゼミ（以下、学長ゼミ）に参加して、2年が経とうとしています。このゼミでは毎週、中山理学長か井出元学長補佐が、お忙しい中私たちのために時間を割いて授業をしてくださいます。授業内容は、一言で言ってしまうと、ズバリ「道徳」についてです。

何か欲しいものを手に入れたり、望む地位を手に入れて幸せを感じることはできません。しかし、そのような幸せは刹那的なものであり、脆く消えやすいものです。ではどうすれば「本当の幸せ」「揺るがない幸せ」を手に入れることができるのか。そもそも、「揺るがない幸せ」とは何なのか。これのキー

ワードとなるのが「道徳」です。幸せな人生を送るためにはやはり道徳が必要であるということや中山学長と井出先生からこの2年間教えていただきました。

授業は毎回とても充実しており、大学の数ある授業の中でこの授業を受けている時ほど「麗大に入ってたよかった」と思う時はありません。授業内だけでは時間が足らず、終わってからもゼミの学生メンバーだけでその日の授業で扱った内容などについて数時間話し込んでしまうこともよくありました。その時にゼミのメンバーから、「この授業を受けて本当によかった」「この授業を受け終わった後は、心が

きれいになっていく感じがする」「中山学長に質問する機会を多くいただいて、今まで100%納得できていなかった道徳的価値観も納得出来るようになった」というような言葉を幾度となく耳にしました。また、ゼミ内のメンバー間の雰囲気也非常に良く、とにかく居心地が良いということも、この学長ゼミの大きな特徴の一つです。授業内でも教えていただいたように、本音で語り合いながらも、互いに思いやり合い、親しい仲でも礼儀をわきまえるということを各々が実践できているからこそ、このような温かく居心地の良い空間を作り出すことができるのだと感じています。

以前、「大学生活になかなか馴染めないで、先輩方の話を聞いてみたい。先輩との接点を持ちたい」と言っている1年生がいますと、井出先生が2人の1年生を連れてこられたことがありました。その日はその1年生も学長ゼミの中に混ざって一緒に授業をやりました。私はその時に「こういう場面でこそゼミの代表である自分の出番だ。1年生を温かく

迎え入れて、彼らの不安を払拭してあげなければ」と内心、意気込んで少し緊張していました。しかし蓋を開けてみれば、私が意気込むまでもなく、他のメンバーが上手に楽しく1年生に話かけ、見事に楽しい空間を作り出していました。そして最後に連絡先を交換し、これからも彼らとの交流は続くことになりました。このとき改めてメンバーに対して、「なんと温かくて優しい人たちなのだろうか」と、心の底から感動しました。そしてこれこそまさに、普段中山学長や井出先生から教えていただいていることをみんなが実践した瞬間だと感じ、非常に嬉しくなったと同時に、「思いやりや優しさ(道徳心)」こそが人の心を本当に満たすのだということを身をもって実感しました。このようにいつも井出先生はさりげなく、私たちに実践と成長の場を与えてくださいます。

しかし冷静に考えてみると、中山学長や井出先生からこのような近い距離で直々にご指導いただけることがいかにありがたいことかということに気がつ

きます。他大学の友人に、「毎週、学長や学長補佐の授業を受けている」と話すと、もれなく驚かれます。世の中には自分の大学の学長の顔や名前を把握していない学生もいる中で、このような近い距離でご指導いただき、学期末には懇親会として、夕食をご一緒してください、普段の授業の時とはまた違った、少しでも楽しめた雰囲気の中で中山学長や井出先生

と、とても楽しく様々な話をさせていただくなど、私たちは非常に恵まれた学生であるということとを常々痛感しています。そして、やはり最も主張したいことは、中山学長と井出先生のお人柄です。

中山学長は非常に博識で、私たちのどんな疑問やリクエストにも必ず的

確に答えてくださいます。気さくで明るく、威張るようなことは決してありません。そして「立場が上になればなるほど、より道徳を実践していかなければいけない」ということを、学長ご自身が実践されているお姿に、非常に尊敬と憧れの念を抱きました。井出先生につきましては、中山学長も「(井出先生のことを)非常に尊敬している」「井出先生は大をもつて小に事(つか)えている」とおっしゃっていました。誰よりも温かく、それでいて威厳があり、とにかく底が見えない、というのが私の井出先生への印象です。言い換えれば、「父親のような絶対的な威厳と、母親のような深い優しさを併せている方」と言うかわかりやすいかもしれません。

またお二方の学問や仕事に対する姿勢が非常に誠実で、尋常ではない努力をされてきたということが垣間見える度、私がいかに甘い考え方でここまでやってきたのかということを感じさせられました。そして中山学長も井出先生もやはりオーラというか、迫力があり、隣にいと当然緊張するのですが、そ



れ以上にずっとそばに居たくなるような温かさがあります。私以外のゼミのメンバーからも、「大学内で中山学長や井出先生をお見かけしたり、すれ違ふと、なぜかとても温かい気持ちになる」という話をよく聞きます。おそらくこの感覚は、実際に中山学長や井出先生に触れさせていただかなければわからないものかもしれません。そして、このように学生のことを思い、どんな人でも歓迎して受け入れてくださる学長と学長補佐は、日本中の大学を探してもそう多くは見つけられないのではないかと思います。是非多くの麗大生に、卒業するまでに一度はこのお二人の先生のお人柄に触れてほしいと思います。というより、触れなければ麗澤大学に来た価値が半減してしまう、とまで私は思っています。

私は2年前にこのお二人の先生と初めてお会いさせていただき、それ以来、「いずれは自分もこのお二方のような高い品性を備えた、本当の意味でのカッコイイ男になりたい」と、より強く思うようになり、これが今の私の人生の指針にもなっています。

このように人生の指針を手に入れ、人生をワクワク生きていくための術^{テクニック}を教えてください。最高の環境がこの麗澤大学にはあるわけです。なので一人でも多くの麗大生にこの素晴らしい環境をフル活用していただくことを願って止みません。

おそらく英語や経済の授業ではなかなか教わることでできないであろう人生を送る上での根幹とも言えるべき「道徳」について、私はこの授業を通して多くを学ばせていただきました。中山学長と井出先生から教わったことを愚直に実践し続け、お二方のような真の人格者を目指し、祖国日本と母校麗澤大学の発展に貢献できるよう一生涯自分を磨き続ける覚悟で、これからも日々努力を重ねていこうと思います。

自主企画ゼミナール…学生が指導を受けたい先生の了承を得て、自主的に企画するゼミナールのこと。自ら参加型授業を作り出すことができる。

◆学生基盤にたった「自主企画ゼミナール」とは

ミクロネシア研修を通して得たこと

梅原勇希
(国際交流・国際協力専攻4年)



リーダー役を通しての学び

平成26年8月、学生有志「Japanesia」のメンバーでミクロネシアでの自主企画研修を実施した。昨年度(前回)実施したミクロネシアにおける廃棄物処理の現状を含む現地調査を受けて、今回の研修はミクロネシア大学の学生との討議および環境教育プログラム案の策定であった。

私にとって今回のミクロネシア研修は間違いなく人生の分岐点になったと思う。なぜならチームリーダーという責任のある立場でメンバーをまとめ、プロジェクト計画という未知の活動に挑戦することが、自分の心を奮起させる多くの学びを得ることができたからである。

私がリーダーとなつて第2次隊のミクロネシア研修を行うおうと決めた理由は3つある。まず1つ目の理由は、第1次隊の意思を受け継いで発展させたかったからである。このミクロネシア・プロジェクトを自分を中心で発展させて、何かしらの「成果」を出したいと思った。次に2つ目は、第1次隊で出会った温かいミクロネシアの人々のために、廃棄物問題改善のための一助になりたいと考えたからである。この気持ちは私自身のミクロネシアにおける環境教育分野での青年海外協力隊合格によって更に高

まった。そして、3つ目が、自分なりのリーダーシップを見出したからである。これから国際社会に活躍していくためには多くの人々との連携が欠かせない。そのためには自分の強みを活かしたリーダーシップで同志をまとめていく力が必要だ。今回リーダーを務めることで、自分の得意とするメンバーの導き方や海外でのチーム行動の仕方を学ぶということがあった。

いざメンバーが集まり、自主企画ゼミナールで事前学習を行う段階になった。私が事前準備の段階で心掛けていたことは、メンバーそれぞれの意見を引き出し、それをより効果的・最善の形にまとめること。また、メンバー個々の良い所を見て、それをチームに活かそうとすること。そして、一人ひとりがチームの役に立っていることが実感でき、何よりも楽しく学べる雰囲気を作ることがあった。メンバー一人ひとりに仕事を分担して任せたり、4年生が2、3年生をサポートできるような体制を作るなど、メンバー全員が積極的に楽しく参加できるように

に工夫することができたと思う。事前準備の段階で自分なりのリーダーシップの像を掴めたことは、大きな成果である。

さて、事前準備を終え、いよいよ研修本番。やはりリーダーとして一番気にかけていたことは、メンバーの健康状態と安全だ。これには細心の注意を払った。様子がおかしいメンバーには声をかけるようにした。1日の終わりには必ずまとめのミーティングを行うようにした。皆それぞれに反省することや目標にしていることがあって、絶えず考えて挑戦している姿が手に取るように分かり、頼もしかった。

今回の研修は私にとって最大のテーマである「国際協力の在り方」について考える絶好の機会になった。私は、青年海外協力隊の受験・合格に向かう最中に将来、自分は本気で国際協力に携わりたいと決心した。しかし、その中で私が明確に自分の中で見出せていないことがあった。それは、「どのような国際協力に関わるかである。その答えを見出すためには自分にとっての国際協力の在り方を見つけ

る必要があると私は考えた。今回の研修の中ではそのヒントになるようなことがいくつかあった。

まず1つ目は、国際協力は結局人間と人間の生の関わり合いの中で生まれる信頼が成していくものだということだ。まだまだ専門性には欠ける私ではあるが、根底にあるこの考え方は大切にしたい。この想いは、実際に違う文化背景を持ちながらもマイクロネシアの学生と交流し、話し合っていく中で気づいたことである。お互いが相手のことを認め、協力することで信頼関係が生まれ、それが今回のプロジェクトの形成に繋がったのだと思う。大きな物事を動かしていくためには、たくさんに人々と連携し、新たな解決策を見出す力が必要である。そのためには、どのような文化を持った人、どのようなポジションに就いている人とも友好的な関係を築いていく人物であるべきなのだ。

2つ目の気づきは、国際協力分野で活躍するためには広い教養がやはり必要だということである。私

はこのことをマイクロネシア大学側の代表であるリコくと活動することで痛感した。彼は自分の専門を法律としながらも、経済のことや観光のこと文化のことなど、広い知識を持っていた。国際協力で他国への支援を考えていくためには、その国の法律や経済、文化なども把握し、分析する必要がある。このような広い教養を持つということも国際協力で活躍するためには必要だろう。

今後の展望

私は今回の研修の中で、大きく分けてリーダーとして大切なことや廃棄物問題への取り組み方、国際協力とは何かなど、多くのことを学んだ。よって今後は、これらをどう活かしていくかである。

まず、卒業までJapanesiaの活動の中では、今までに得た自分なりのリーダー論やチーム論を後輩たちに伝えていきたい。そして、将来は世界を舞台に、国際協力分野での仕事に就きたいと考えている。

目標を持ち、継続するということ

林田 夏美

(英語・英米文化専攻3年)



麗澤大学には、学生が指導を受けたい先生の下で自分たちの学びたい分野を自由に学ぶことができ、「自主企画ゼミナール」という画期的なシステムがあります。このゼミナールでは、学生が主体となつて授業を進めていくため、通常の授業では経験できないような深い内容を学ぶことができます。そんなゼミナールで、私が学んだことは「目標を持つこと」、そして「継続すること」の大切さです。

私は2年生の時から2年間、北原賢一先生の自主企画ゼミナールを履修しています。このゼミナールでは、主にアメリカのTVドラマや映画を題材に、翻訳研究を行っています。以前から、他言語で話さ

れている会話をその言語が分からない人々が理解できるように手助けをする翻訳に興味があったので、自分がこの授業を通じてどれだけ翻訳が出来るようになるか、期待を膨らませていました。しかしこの自主企画ゼミナールに入るまで、自分で英語の作品を翻訳したことがなかったため、不安もたくさんありました。こうして不安と期待が入り混じる中、ゼミナールがスタートしました。

1年目では文法書を用いてよく使われる英語の言い回しを学習しながら、『スターウォーズ』『羊たちの沈黙』『TED』といった様々なジャンルの映画の翻訳に取り組みました。まず私たちは、事前にグ

ループごとに誰がどの部分の翻訳を担当するかを決め、各回1つのグループが作成したオリジナルの字幕を確認しながら、映画を英語音声・英語字幕で視聴するという手順で翻訳の作業を行いました。初めは、普段の授業でネイティブスピーカーが話す英語よりも遥かに速い登場人物の台詞(せりふ)を聞き、誰がどの台詞を話しているのかも判断することができませんでした。また、登場人物の台詞には、日本語に直訳すると意味が通らなくなってしまうことも多く、1年目に自分が取り組んだ字幕の作成には多くの時間を費やしました。このように、学生が翻訳をする際に分からなかった箇所や、意味を取り違えていた字幕は授業内で修正を行います。私はこの作業を通じ、今までは教科書や問題集でしか出会ったことのないような表現、また、教科書ではなかなか扱われないような、実際によく使われる砕けたアメリカの日常会話を学ぶことができました。

そして2年目では、連続TVドラマ「ツイン・ピクス」の翻訳に取り組みました。前年度に取り組

んだ映画の翻訳に比べ、履修している学生はこのドラマを誰も見たことがなく、サスペンスドラマということもあり、さらにレベルが上がった翻訳研究が始まりました。この作品は、ツイン・ピクスというある地域で起こる殺人事件を解決していく物語です。ドラマの中では地域の文化を背景としたジョークや歌、警察や検死の専門用語が飛び交うなど難しい単語やフレーズが多々登場してきました。また、個性的な登場人物も多いため話し方や話す速度もバラバラで台詞を聞き取ることが難しいことも時々あります。しかし、私が自主企画ゼミナール2年目で実感したことは、明らかに前年度よりも聞き取れる単語が増えてきたということです。

私はこの翻訳研究を始めた頃から洋画や外国のTVドラマを見る際に気をつけてきたことがあります。それは聞き取れた単語があったら自分で声に出してみるということ、そして英語音声・英語字幕で見ていても、なるべく字幕を見ず、音声を重視して聞きながら作品を見るといことです。しかし初め

から上手くできたわけではありません。特に1年目では、英語字幕を見ても英文を理解できなかったことがあります。そんな時は学生が作成したオリジナルの字幕と先生の解説をもとに解決してきました。こうして、少しずつではありますが、回を重ねるごとにネイティブの話す英語のスピードにも慣れてくるようになってきました。

そして私は自分の中で新たな目標を立てました。それは「意識について考える」ということです。授業では、毎回学生がオリジナルの字幕を作成し、それをもとに作品について確認していきます。しかし中には、単語のレベルとしてはそれほど難しくないので前後の台詞と合わせて確認すると分かりにくい台詞や、日本語で直訳すると意味の通らない複雑な台詞が出てくる場合があります。このような場合は、翻訳家を実際に訳した字幕を確認します。この授業を始めたばかりの頃は一文一文正確に訳さなければという思いが強かったのですが、2年目に入り英語を聞き取ることに慣れ始めてからは、「なぜ

このような訳になるのだろうか」と直訳することだけでなく、文脈を考えて訳すというところに目を向けるようになってきました。その中で、ただ作品を見て台詞を正確に聞き取ることが出来ればいいのではなく、台詞の裏に秘められた登場人物の気持ちをしつかり把握することが、より意味の通る訳を作ることができるポイントなのではないかと翻訳する上で重要なことを学びました。

こうして自分で工夫して翻訳研究に取り組んできたことにより、現在では日本語字幕がなくても、ある程度、状況や話の内容を把握できるようになりました。授業外で見ると洋画でも、英語を聞き取ることに慣れてきたので、現在では、今まで自分が日本語字幕で見てきた洋画を英語字幕で視聴し、和訳と英語がどのように違っているのかを比較することにも楽しさを覚えました。また、この自主企画ゼミナールで学習したことを活かすため、別の授業でも翻訳に関する知識を学んでいます。そちらの授業では字幕として映し出す台詞の文字数や時間などを気にし

ながら字幕を作成するのですが、自分が意識してきた意識が大いに役立っています。

私は常に目標を掲げて翻訳研究に取り組んできました。時には難しいこともありましたが、継続することでの成長することが出来ました。では、なぜこんなにも目標を掲げて継続することができたのか。それは、自分が以前から興味を持っていた翻訳という分野について、自分たちのやりたい形式で学ぶことができたからだと思えます。普段の授業の中で、授業内容を決めるのはほとんどの場合先生方だと思えますが、この自主企画ゼミナールでは、学生が授業の進め方や担当の割り振りなどを先生と相談しながら決めることが出来ます。ゼミナールの代表として授業の運営に関わったことで、主体的に学ぶ姿勢や責任感も培うことが出来ました。また、限られた人数で、同じ分野に興味のある仲間と共に課題

に取り組むことで、よりモチベーションを高くして授業に取り組むことが出来ます。授業以外にも先生を中心にして皆で集まり、授業で扱った映画やドラマの内容について語り合うなど、学生同士はもちろんのこと、先生との交流も深まりました。

自主企画ゼミナールでは日々学ぶことがたくさんあります。自分がゼミナールで学んだ「目標を持ち、継続すること」は将来自分が社会人として生きていく上での立派な強みになったと思います。私は後輩の皆さんにも、自分の強みを発見し、伸ばしていったほしいと思います。そのための大きなチャンスが自主企画ゼミナールにあるのです。自分の興味のある分野だからこそ伸ばせる力だと思いませんか。この自主企画ゼミナールを大いに活用して、ぜひ大学生活を充実したものにしてください。

可能性が広がる自主企画ゼミ

上國料英美

(中国語専攻3年)



私たちの自主企画ゼミは、もともとは2つ上の先輩達が立ち上げたものでした。大学に入学してから初めて中国語に触れ、勉強していくうちに、だんだんと会話をするの楽しさがわかるようになり、もっと自由に中国語で会話がしたいという思いから、私たちの代でもこの自主企画ゼミを立ち上げることにしました。

自主企画ゼミは名前の通り「自分たちで企画する」ゼミなので、授業の内容はすべて自分たちで考えます。私たちは、中国語を用いての会話を中心に勉強したかったので、毎週違うテーマを取り上げ、そのテーマについて各々がスピーチし、そのスピーチ

国語を用いてすることが非常に難しく、特に韓国語は発表者以外はまったく韓国語がわからない人ばかりだったので、すべてが新鮮でとても盛り上がったことをよく覚えています。

外国語で自分の意見を思い通りに述べるといふことは想像以上に難しいです。大学で約3年間中国語を学んできて、日常会話レベルであればなんとか話せるようにはなってきたものの、自分の意見を数分に亘って中国語で伝えるとなると、なかなかスムーズに話すことが出来ず、悔しい思いをしたことも多々あります。

私は大学2年次の後期の約半年間、台湾に留学しました。台湾では大学の学生寮に住んでいたのですが、一部屋に3人でルームシェアというかたちで住んでいました。ルームメイトは台湾人と韓国人だったので、もちろん一切日本語を使うことはできません。朝から夜までほとんどの時間、生活を共にするので、「いつてらっしやい」「おかえり」「電気消していい？」など、日本語では毎日何気なく使ってい

ちに対して質問等をして会話をしていく、という授業を行っています。もちろん、毎週授業で取り上げるテーマも自分たちで考えます。例えば私たちが今までに取り上げてきたテーマの一部をあげると、「幼少期の思い出」「お金の使いかた」「中国語で外国語を教える」などがありました。幼少期について話したときは、各々が幼少期の写真を持ち寄りその写真を見せながら思い出話をしたり、外国語を教えることをテーマにしたときには、第3言語で韓国語を履修している人は韓国語、それ以外の人は英語と日本語に分かれ、グループでそれぞれの言語について説明し合ったりしました。外国語の説明を他の外

るけれど、中国語では今まで学んでこなかった、教科書では学ばないような言葉ばかりが必要な毎日でした。最初はなかなか自分の思ったことを伝えられず悔しい思いをしてばかりで、時には中国語で会話をすることが苦痛に感じることもありましたが、1週間も経たないうちに話すことが楽しくなり、自分の語彙力が足りず悔しい思いをすることは変わらなくなりましたが、苦痛に感じることはなくなりました。ルームメイトの2人とも冗談が言い合えるほど仲良くなり、雑談を毎晩遅くまでしたり、台湾人のルームメイトの実家に遊びに行ったり、日本人の友達と接するときと何も変わらないような、国籍の違いを全く感じないほど仲の良い友達になることができました。私と韓国人のルームメイトは何かわからない中国語があつたらすぐに台湾人のルームメイトに聞き、私たちが住んでいた学生寮には日本人留学生が多かったので、日常会話でよく使う日本語を私が2人に教え、ルームメイトの他にも韓国人留学生が寮に5人いたことや韓国ドラマなどを見て

いて興味があったことから、日常会話でよく使う韓国語を教えてもらっていました。大学の授業でも中国語の勉強はしていましたが、日常生活をすべて中国語を用いて送ることで、勉強をしているという感覚はあまりないまま、毎日本当に楽しく自然と中国語が身につけていました。

ルームメイトや他の台湾人の友達とも仲良くなっ
ていくうちに、外国語を学ぶうえでは、何よりも
「学ぶことを楽しむ」という、ごく当たり前のよう
ではあるけれどもなかなか難しいことが大切なのだ
ということに気づきました。台湾でのこの収穫を胸
に、帰国後も中国語を楽しみながら学ぼうと決め、
そこで、同級生と以前から「やりたいね」と話して
いた、自主企画ゼミの立ち上げを決意しました。

私たちが普段受けている授業には文法や検定対策
の授業などがあり、中国語を発する機会も、中国語
で会話をする機会も沢山ありますが、各々が数分間
中国語で自分の意見をスピーチする、または、各々
が意見を出し合って話し合うというような授業はな

うが良いよと教えてくださったりもします。私たち
の自主企画ゼミの先生は中国人の温琳先生です。大
学1年次からずっと教わっている先生なので、私た
ちも気軽に先生に質問することができたり、発表し
終わると様々な質問をしてさらに話す場を与えてく
ださったり、本当に「授業」というよりも「会話」
することを大切にしてくださる先生です。温先生の
授業は他にも検定対策の授業などがありますが、自
主企画ゼミは、さらに生きた中国語を学ぶことがで
きる、私たちにとっては欠かすことのできない授業
です。

私たちの自主企画ゼミのメンバーは、全員中国語
専攻の同級生です。他の授業を履修していて自主企
画ゼミを履修していない学生もいますが、中国語専
攻の同級生のうち、ほとんどの学生が自主企画ゼミ
を履修しています。なので、授業中は本当に和気あ

かなかありません。普段日本語でしているような雑
談、会話などを授業中に時間をかけて行う機会がな
かなかないのです。もちろん普段受けている授業が
なければ、今のよう中国語が話せるようにはなり
ませんでしたし、欠かすことのできないとても大切
な授業です。しかし、1・2年時で中国語の基礎を
身に付け、会話をするこの楽しさがわかってきた
今、もっと日常的に中国語に触れる機会を増やすた
めに、先輩がたが立ち上げたこの自主企画ゼミが私
たちにも必要だと思ったのです。

実際の会話では事前に話す内容を考えてきたり、
長考したりすることはなかなか出来ません。この自
主企画ゼミは私たちが中国語でもっと流暢な日常会
話が出来ようになるための良い練習場所でもあり
ます。もちろんスピーチをしているときに、中国語
でどう言えばいいかわからなかったり、単語が出て
こなかったりして、口ごもってしまうときもありま
す。しかしそのような時には、すぐに先生に質問す
ることもできますし、先生がこういう言い回しのほ

いあいとしています。中国語専攻は一学年の人数が
少なく、私たちの学年も20人にも満たない人数で
す。少人数ということもあり、もともと皆仲は良い
のですが、自主企画ゼミを通してさらに仲が深まっ
たように感じます。昨年末には自主企画ゼミの学生
と先生とで親睦会もしました。温先生とゆっくり食
事が出来たのも初めてでしたし、普段あまり話さな
いような話もできて、とても貴重な時間を過ごすこ
とができました。

自分たちで授業内容を企画して、やりたいことが
本当に実現できる自主企画ゼミ。学びの場の可能性
が広がる、自分たちでその可能性を広げることが出
来る、この素敵なゼミを利用しないのは本当にもつ
たいないです。先輩たちがこの自主企画ゼミを受け
継いでいってくれることを心から願っています。



入学式 (2014.4.2)



留学生歓迎懇親会 (2014.4.25)



留学フェア (2014.6.26)



第26回「1泊2日の体験入学」(2014.8.3~4)



第2回ミクロネシア研修 (2014.8.24~9.7)



全米オープン車いすテニス単複で優勝・年間グランドスラム達成した国枝慎吾選手が母校に凱旋報告 (2014.9.12)



別科日本語研修課程秋入学・特別聴講生開講 (2014.9.10)



廣池幹堂理事長 藍綬褒章受章 (2014.11.3)



国際フェスタCHIBA (2014.10.5)



第51回麗陵祭 テーマ：ココロオドル (2014.11.1~3)



ホーチミン市国家大学人文社会科学大学で日越副教材出版祝賀会 (2014.11.4)



国際交流もちつき大会 (2014.12.5)



第91回東京箱根間往復大学駅伝で村瀬圭太選手が快走 (関東学生連合チーム・2015.1.3)

地域に愛される麗澤大学をめざして

大学院・オープンカレッジグループ主任 横田茂弘



不安だらけのスタート

「横田さんはいつまで地域連携を担当するのですか？」

今から3年前の平成24年4月、現在の職場に移って間もないある日、光ヶ丘商店会との初会合の席上で商店会の方からこう尋ねられました。公益財団法人モラロジー研究所に約20年間務めた私は、麗澤大学へ出向という人事異動を受けた直後で、まさにこれからどうなっていくのか不安な気持ちでしたので、この質問には軽くショックを受けたのを覚えています。

この質問の背景には「担当者がコロコロ変わってしまうのは困る」といった意味合いと、横田という男がどれくらい光ヶ丘地域と関わってくれるのか、という「値踏み」をされているかのように感じられました。

光ヶ丘商店会の立場から考えると、それはもつとも、本学は平成22年に光ヶ丘商店会と「地域交流協定」を締結したものの、それから具体的な活動が進められていませんでした。しかし、23年の東日本大震災を機に、商店会から2万着の復興支援Tシャツを提供していただいたことをきっかけに、ようやく、学生との交流が生まれ、連携が加速してい

ました。

さらに、本学の複合施設Reitaku Student Plaza「はなみずき」が24年3月末に完成を迎え、「これから」と期待された矢先に突然の担当者の交代という事態でしたので、商店会も学生も私も誰もが期待と不安が入り混じる心境で、皆手探りの中からスタートしたのが思い出されます。

まずは自分自身が動いてみなければ何もわからない

突然の麗澤大学への異動と、横浜市に居を構える私としては、柏市はもとより、光ヶ丘地域のことも分らない状態でした。麗澤オープンカレッジと共に「地域連携」を担当することになった私は、そもそも地域連携の「地域」とはどの範囲か、という基本的なことが疑問になりました。

要するに、グローバル（海外視点）なのか、ローカル（地域視点）なのかと、考え方のスタート地点をどこに置くか、というものです。また、「グローバル」（地球規模の視野で考え、地域視点で行動す

る (Think globally, act locally)』という考え方も理解できるものの、その活動領域を捉えた後、具体的な行動に移すまでのプロセスと、自分自身の知識と経験の無さから、悩みは深まるばかりでした。

とにかく「はなみずき」が完成を迎え、光ヶ丘地域に活動拠点が生まれたことで、「まずはやってみなければ何も分らない」と思い立ち、次の3つを私自身の課題として実践に取り組みました。①「はなみずき」を活動拠点として、十分に活用すること、②光ヶ丘商店会との連携を深め、商店会の方々から信頼を得ること、③学生自身にとって成長できる活動とすることです。

地域に愛されるとはどういうことなのか

私自身が光ヶ丘商店会をはじめ、地域の方々との人的交流が広がっていく中で、すぐに衝撃的な事実

に直面しました。それは、「学園は地域住民からは遠い存在であり、家族の中で麗澤に通う学生でもない限り、ほ

とんども関心を持たれることはない」という事実です。地域の人には、本学の理念や教員がどのような研究をしているかなんてことは、ほとんど評価されません。私達は、モラロジを基本とした崇高な理念を持ち、社会の道徳化を推進するとしても、地域に住む方からすればあまり関心がありません。

むしろ、きちんと挨拶をする教職員や学生がいるか、キャンパスの外に落ちていたゴミを拾っている人がいるか、町内会活動に積極的に参加しているか、といったことなどが見られているのです。

確かに、廣池学園やモラロジ研究所に所属する職員の中で、これまで町内会長や役員を引き受けられた方も大勢いらっしゃいますし、近隣の小・中学校のPTA会長として活躍されている方もたくさんおられます。また、大小さまざまなイベントや交流も盛んに行われていることもよく知っています。

しかし、四方を塀に囲まれた学園は、光ヶ丘地域に溶け込むというよりは、地域からはやや特殊な目で見られ、微妙な距離感で接してこられてきたよう

に思います。この感覚は、実際に地域の方と触れ合った者しか実感できないのかもしれませんが。

なぜ、そのような距離感が生まれたのか。本学の前身である道徳科学専攻塾が昭和10年に開設された当時は、光ヶ丘（当時は小金町）周辺は何もなかったといえます。同32年に「日本初のニュータウン」として光ヶ丘団地ができてから、爆発的に人口が増加していきました。当時の学園の状況を考えると、学園の中は変わらなくとも周りが劇的に変化していった時代の流れで、互いの意識のズレが生じていたのだと思います。

学園が光ヶ丘地域に愛されるためには、一時的な交流だけでは不十分だと確信しています。職員が光ヶ丘に住んでいるかどうかは関係なく、キャンパスが「光ヶ丘」にある以上、日頃から地域住民と繋がりをもち、信頼関係を深めるために務めていくことが必要ではないかと思えます。

学生の気づきから学ぶことの大切さ

「たっちちゃん、『地域と繋がる』っていうことが、なんだか分かったような気がするの」と突然言われたのは、大学に移って半年を経過した頃でした。私



地域活動を頑張るRefreeの学生達

のことを「たっちちゃん」とアダ名で呼ぶその学生は、ボランティアサークルRefreeに所属し、小学生を対象としたイベントを担当するリーダー的な存在の女子学生でした。冒頭にも書きましたが、私自身が地域と繋がり、地域から愛されるためにどうすれば良いのか、そもそも

「地域を活性化」するための「麗澤大学の役割」とはどういうことなのかを模索していた私は、学生の視点では何が見えるのか、何かしらヒントを得たいと思い、真剣に耳を傾けました。彼女は続けてこう言いました。

「私はもっとイベントをしつかりやって、たくさん人を集めることが大事だと思っていました。それも大切なんです。昨日買った物や、もつと大切なことに気がついて、昨日買った物や、もつと大切なことに気がついて、歩いていったんです。そうしたら、『おはよう』とか、『おう、元気か』とか、『うちの子供がお世話になって』とか、いろんな人から声をかけられたんです」といいます。最後にこの学生は、「私、分かったんです！それが地域に繋がるといって、実感だ。それは大きなデパートでは絶対に味わえないことなんだって！」。

この学生との、何気ないやりとりが実に衝撃的で新鮮でした。確かに学生は、自分に関心があり、面白いことばかりに興味が行きがちです。また、イベ

ントに参加している子供や、それを見守る大人たちの視点に立ったり、まして地域全体に目を配るといった発想には、なかなか到達しないものです。

しかし、この学生のように、「他者との関係性」が自分自身の存在価値として、ガッチリと歯車が噛み合った瞬間、現実的な実感となることがあるということが分かりました。

彼女の言葉が、今の私自身の原点であり、原動力となっっています。その学生はすでに卒業し、現在は英語教員として社会で活躍していますが、教員になつて半年ほど経ったときに、私のところに訪ねてきました。

「たっちゃん、今日、商店会の方からまた声をかけられたよ。光ヶ丘はほんとうに温かいな。私は大好きです」というのです。この言葉を聞いた場所が大学の事務室だったため、人目を気にして涙をぐつと堪えるのに必死でした。後日談ですが、商店主にその時の様子を尋ねたところ、「久しぶりに会ったから懐かしかったね。またいつでも遊びに来てね、

と声をかけたよ」とのことでした。

点数や単位には絶対にはできないことですが、「他者との関係性」を実感することで学生が大きく成長し、地域も若い学生との触れ合いによって、気軽に挨拶を交わせる明るい街ができています。この事例は、ほんの些細な出来事ではありますが、そうした学生が10人、100人と増えていけば、もっと温かみのある街になるのだろうと楽しみにしています。

学生が地域で学ぶ意義とは

「学生が地域で学ぶ意義とは何か」ということについて、その定義も大学における仕組みも確立していない状態であるため、私としてはいつも試行錯誤の連続です。

ときに地域は難しいと感じます。我々大学で働く者同士が共通の理念、同じ方向性を向いているのに対し、地域にはさまざまな年代や家族構成、多種多様な職種や境遇の方が暮らす、「生活そのもの」だ

からです。

この光ヶ丘でも住民同士の絆が失われつつあります。少子高齢化の波が押し寄せ、独居老人の世帯も増加し、孤独死されたということも耳にするようになりました。また、昔は子供はみんなで見守る存在だったはずが、大人はよその子供には声をかけなくなりました。

お年寄り、子供達、それを取り巻く様々な家庭、独身者、そして本学の学生や教職員、多くの人が光ヶ丘で生活している、コミュニティにつながる場面が少ないというのが現実です。

商店も郊外型の大型店やネットビジネスに押されて、どんどん閉店しています。公園も人が居ないか、居てもまばらで淋しい社会となりました。

地域には大きな課題が山積しています。学生がいくら地域活動を懸命に行ったとしても、その効果は

微々たるものかもしれません。世代を越えたコミュニケーションを通じて、汗をかき、悩み、時には涙することもあるでしょう。しかし、学生時代にこうした貴重な経験をするからこそが、一人ひとりの成長につながるのではないのでしょうか。

学生自身が「自分で考え」「自分で行動し」「他者との関係性を実感すること」で、人とのつながりの大切さや喜びを深く理解できると私は信じています。自ら行動することが成長のための出発点です。まずは、こちらから一歩を踏み出す。地域に溶け込むうとすることによって、徐々に地域の方から心を開いてくれるようになります。全ては人間関係であり、その関係性ができて初めて、「地域に愛される大学となる」ことを私の信条として、これからも全力で学生をサポートしていき、学生とともに、日々成長していきたいと思えます。

麗澤教育くボランティアとは

斎藤 樹

(経営学科3年)



私はボランティアサークルRefreeでサークル長を務めています。Refreeでは様々なボランティア活動を行っています。大きな柱としてあるのが光ヶ丘商店会と連携をして、地域を盛り立てていく活動です。

私にとっての現在の活動というのは、まさに生きる勉強の場と言えます。私は麗澤大学では、経済学部経営学科に在籍し、企業の社会的責任を中心に学んでいます。光ヶ丘商店会と共に地域貢献をしていくというのは、まさに麗澤大学の社会的責任の最前線にいます。まさに麗澤大学ではありません。そういった場所が出来るというのは、貴重であり、

日々の講義もまた違った視点で学べることが多いです。

そして、一人の学生としても現在の活動は、かけがえないものとなっています。それはあまりにも多くのことが、Refree、光ヶ丘商店会の人々から活動を通して学べたからです。話し合いの際にどういった感じで進めていくのが良いか、ボランティアに対する考え方、そしてボランティア活動に長らく関わってきた先輩とのコミュニケーションは、私にとっては新鮮でした。また光ヶ丘商店会の人々は、私たちの親と同じくらいの年代であり、最初はどうやって関わっていけばいいのか手探り状態で、戸惑い

もありました。しかし徐々に話せるようになっていき、大人の方とどうやって接したらよいか、また商店会でお店を営んでいるから聞けるお話もあり、自分にとって新しい視点を得ることもありました。

また時にはお叱りを受けることもありましたが、そういった際にも、次はどうすればよいか、あるいはこんな時はこうしてはどうだろうか、という風に、次に繋げていけるプランなども示していただき、非常に勉強になりました。

私にとって1年生から参加してきたRefree、そして光ヶ丘商店会の活動ですが、もう4年生になってしまいます。振り返れば楽しかった時、困った時、辛い時には必ずサークルメンバーがいてくれたと感じます。だからこそ、私自身は未熟ではありますが、サークル長を務めることが出来たと思います。

そして後輩には「ボランティアとは何か」という問いかけをしたいと思っています。実はこの問いかけは、私がまだ1年生の時に、Refreeの2代目のサークル長から問われたことです。確かに『広辞苑』や

インターネットで検索すればボランティアという言葉の意味は知ることが出来ます。しかし、その背後にある本当の自分なりの意味というのは、実践を通してしか分からないかと思っています。私はその自分な



りの意味を3年生になって、サークル長になって初めて見つけました。それは「コミュニケーション」です。ボランティアを通して、私は本当にいろいろな人に会うことが出来ました。普段の大学生活では出会えない人ばかりです。そうやって出会った人に、多くを教えて頂き、学ぶことができました。また実際のボランティア活動も、どうやったなら地域に住む方とコミュニケーションが取れるのかということが本質にあると私は思いました。だからこそ受け売りにはなってしまいました。後輩にはこの問いをしたいと思います。

また私自身の伝えたいこととして「単位は取るう」ということです。これがなぜ大切なのか。それ

は、講義では自分で考える、新しい視点を得るという体験が出来ます。こういった事は、サークルでの話し合い、商店会の人々のやり取りの中で大切な基礎となります。講義の内容自体も、活動に活かすことができ、日々の講義そのものが面白くなります。だからこそ、講義にしっかりと出て単位を取るというのは非常に大切です。

最後になりますが、大学生という期間は限られています。単位を取りつつ、様々なサークル、あるいはボランティアに時間をつぎ込める貴重な機会なので、後輩にはどんどんとそういう世界に飛び込んでほしいです。

〔学生の地域貢献活動〕

地域連携事業を通して

— 学びとメッセージ

「光ヶ丘地域連携事業」というものを知り、それに関わり始めてから、早いもので実に3年という月日が過ぎようとしています。

1年生のときに初めて活動に関わり、右も左も分からない中で「にぎわいづくりイベント」に参加しました。そこに運営側・参加側問わず多くの人が関わっていることを知ること、この活動が持つ意義をただ漠然と感じ取ったことを記憶しています。2年生になり後輩が出来ると、私は「伝えられる立場」から「伝える立場」となり、活動に対するより一層の理解と意味づけが求められるようになりました。良くも悪くも自分なりのやり方が確立し始めた

青木 周
(経営学科3年)



この時期には、とにかく初心に帰り、今一度事業の在り方を見直すことも重要となりました。3年生となり引退を間近に控えると、「連携事業そのものの今後」を明確に意識するようになりました。「後輩達が必要としている情報は何か」「自分自身やり残したことはないか」など、今まで歩いてきた道を振り返ったとき、今までよりも高く、広い視点で物事を見ることが出来ている自分に気がきます。私にとって地域連携事業とは、まさしく成長の場でした。

「参加者一人ひとりが協力して創り上げる」——これは私が「光ヶ丘フリーマーケット&新鮮朝市」に関わり始めてから一貫して意識してきたことのうち



の一つです。ただ出店の準備や商品の売り買いをするだけでなく、そこから得られる交流の輪を大切にしたい。ひいては、そこから地域の活性化へと繋げていこう……そういった思いがありました。

そのようなフリー

マーケットへの取り組みから、いつしか私にとっての地域活性化のイメージそのものが、「交流の輪を広げてゆく」ことになりました。光ヶ丘地域には様々な人が暮らしており、そして様々なコミュニティが存在しています。それらが互いを認識し、繋がり合いを持つことで、新たな価値が生まれる。これは、地域活性化を図る上で大きな力になっていくのではないのでしょうか。

ここでの私自身の大きな学びは、「交流の輪」は、ひとりの力、ひとりの働きかけのみで成され得るものではないということです。したがって、私たちの活動も私たちのみでは成り立ちません。これは地域連携のみならず、あらゆる課外活動でも言えることだと思えます。私たちの活動の先には必ず地域の人々という存在があり、私たちの隣には協力して下さる大学と商店会の方々があります。独り善がりの活動ではなく、「私たち学生は、期待された役割のどの部分を担えるのか」という思索が重要なのだと思えます。

大学としての地域貢献を貫徹するためには、今以上に学生を巻き込んだ、全学的取り組みへと発展させることが求められています。Retireの後輩はもちろん、学生の皆さんには、地域のニーズとして「私たち学生の力」が求められているということ、私たちの活躍出来る舞台は、学校の殻を破った先にも存在するのだということを知って頂ければと思います。

〔学生の地域貢献活動〕

この町に素敵な音楽と笑顔を

山上和貴

(経営学科3年)



「賑わい事業」と銘を打って創り上げる一つひとつのイベントは、決して単体のお祭りではありません。大学の職員と光ヶ丘商店会の皆様が、地域と向き合い永続的にアプローチする思いと夢にあふれた事業です。その事業に学生として関わらせていただいたことに誇りを持っています。

私はこの事業のひとつである「光ヶ丘ミュージック・フェスティバル（音楽の祭典）」の企画担当を1年次から3年間務めました。初めはタイムスケジュール作成や出演者との交渉等の役割をこなすことに必死でした。そして準備していく段階で、自分の行う目的がはっきりしていないことに気が付きまし

た。そこで私は音楽祭に2つの目的を定めました。1つ目はこの事業全体の目的である「地域活性化の理解に努め貢献できるイベントにすること」、そして2つ目が「笑顔の生まれる空間を創ること」でした。目的を見つけたときの感動はとても大きいものでした。目的の設定は自分が頑張る理由にもなります。まずは地域活性化事業についてしっかりと学ぶために商店会の笠原輝幸理事長とは何度もお話ししました。その打ち合わせの時間の数だけ私はこの事業に愛着を感じました。そして二つ目の目標は企画責任者としての私の考えの中心にありました。どのようにしたら参加したお客さんに笑顔になってもら

えるかを考えるだけでもワクワクしました。「子どもたちも楽しめるようなブースを作ろう」「抽選会などお客さんも参加できる企画を作ろう」。そのような思いから生まれたアイデアが、形になっていくことがとても大きな喜びでした。「光ヶ丘ミュージック・フェスティバル」が今後も光ヶ丘に「素敵な音楽と笑顔」を生み出すイベントであってほしいし、そのようにしていきたいです。

私はとにかく人の笑顔が大好きです。地域の方々だけでなく学生スタッフの仲間たちにも笑顔でいてほしいと思いました。自分たちで作り上げたという実感のもてるイベントがたくさんの笑顔を生み出す。実感が持てるよう役割を分担し、最後までサポートを行い、みんなが笑顔で準備に当たれるように心

がけました。その結果、「楽しかった」といつてくれるスタッフが増え、そのときの笑顔はどれもすばらしく、忘れることは出来ません。「一人ひとりの意見に耳を傾け、手を差し伸べる。そして笑顔を引き出す自分なりのリーダー像」をこの事業を通して見つけました。

イベントに来られる地域の方々、職員や商店会の皆さん、そして学生の仲間たち——私はこの活動を通してたくさんの人と出会いました。出合いの数だけたくさんの学びや気づきがありました。自分を育ててくれた光ヶ丘の町会の皆さんに少しでも恩返しできるよう、これからも地域に密着した活動を続けていきたいと思っています。

〔学生の地域貢献活動〕

子どもが安心して遊べる光ヶ丘地域を 目指して活動した2年間

子ども天国担当 藤田真奈美

(国際交流・国際協力専攻3年)



私は、大学近隣の商店会の人びとと協同しながら光ヶ丘地域に住む子どもを対象に行われるイベントの企画・運営責任者を3度務めさせて頂いています。共働き家族・核家族の増加やご近所付き合いが希薄になる中で子どもを狙った犯罪が増え、子どもを取り巻く環境は大きく変化しています。光ヶ丘地域も例外ではなく、子ども達は外で遊ぶ機会が少なくなっています。この光ヶ丘地域が発信地となつて、犯罪などの不安から解放された子ども達が外で思い切り遊べる環境を創り、保護者同士が顔を合わせる機会を創りたいと思います。子ども達が遊

ながら学んでいけるようなイベント作りを心掛けています。私が最初に企画した第3回子ども天国(2014年3月開催)を例に挙げると、このイベントを機に、今後子ども達が商店街に立ち寄るようになるよう、光ヶ丘商店会の店主さんと話し合いお店巡りをするスタンプラリーを行いました。

子ども天国担当者として活動してきた2年間は、人生の中で一番成長できた2年間です。このイベントに携わり、日常の学校生活では絶対に経験することの出来ない多くのことを学びました。今回は3つの学びを書かせていただきます。1つ目が、人と関わる上でのコミュニケーションがいかに重要かとい



うことです。必ず誰かと関わらなければ良いイベントを創ることは出来ません。今まで関わってきたことのない社会人の方に対しては私らしく接することで、お互い信頼しあう関係を築き、より良いイベントを創り上げることが出来ると実感しました。2つ目が、自分本

ありきたりではありますが、人に心から感謝することを経験することが出来ました。繰り返しになりますが、私が一人で創ってきたイベントではありません。子ども天国を楽しみに待っていてくれて当日は弾ける笑顔を見せてくれる子ども達、企画倒れになつたとき相談に乗ってくれたメンバーや準備段階からイベント終了後まで常に厳しく指導してくれる教職員・商店会の皆様がいてこそ成り立つイベントです。過去3回のイベントでは、感謝を忘れるときがないくらい様々な人に助けられて過ごすことが出来ました。

今後も、学生達には商店会の方々と協力し合いながら一人でも多くの子ども達を笑顔にしてみたいと思います。そして、地域住民が子どもを見守り、子どもが安心して外で遊べる日本一の地域を創って行って欲しいと思います。

麗澤大学と私

三村真衣

(旧姓 藤井)
第65期 英語学科卒



麗澤大学を卒業し、9年。卒業後、高校の英語教師

を経て、今では専業主婦・二児の母となった私のもとに、この『麗澤教育』の執筆依頼が来たことに、私は大変驚きながら、でもとても懐かしい思いでこの原稿に向かっています。私は、今の自分があるのは麗澤大学で学んだおかげ、麗澤大学で学ぶことが出来て本当に幸せだったと心から思っています。

今回は、せっかくいただいたこの機会に、麗澤大学での思い出を振り返り、麗澤大学での学びが今の自分にどのようなつながっているのかを記したいと思います。

麗澤大学で学びたい

得意の英語を伸ばし、国際協力を学び、何か人の役に立てる人になりたい、明確な夢を見つけないと進路を少しずつ考え始めた高校2年生の夏、私に両親と高校時代の恩師が勧めてくれたのが麗澤大学でした。私の父も、その恩師も麗澤大学卒業生。自然と麗澤大学の魅力に惹かれて話を聞きに行ってみると、教授の方々は父の恩師や先輩であったり、私の大親友の叔母様であったり、温かい先生ばかりでした。この先生方のもとで英語や国際協力を学びたい！麗澤大学がすっかり気に入った私は、高校生の早い段階から麗澤大学に進学したいと思うようになっていました。

英語劇に夢中になった1・2年生

大学時代、私は外国語学部英語学科に所属し、1・2年生の頃は、高校とは全く違った内容・スタイルの授業を楽しみながら、英語劇グループの一員として、仲間と一つの劇を作り上げるために汗を流しました。シェイクスピアの作品がM・K・トリキアン先生の演出によってメンバーに合った台本になり、先生の楽しく厳しい演出のもと毎年レベルの高い劇が完成し



卒業式の記念に仲間たちと

ます。英語劇グループでは、舞台の上に立って役を演じること、逆に舞台の裏で劇を支えること、そのどちらをも体験することが出来るので、学べるのが沢山ありました。まず、上演する作品が決まり、先生の書かれた台本を読み、配役が決まり、役の練習が始まると同時に衣装作り、大道具・小道具作り、劇中の音楽作りも始まります。一つひとつが手作りで本格的で一生懸命だからこそ、劇の制作中は、涙あり笑いありのドラマが沢山ありました。今となってはいい思い出です。

英語劇の活動の中でも、特に思い出に残っているのは、2年生の時に「ウインザーの陽気な女房たち」という作品で主役を演じる機会をいただいたことです。憧れていたプリンセスのような役ではありませんでしたが、陽気な女房になりきった数か月。大変だった練習を乗り越え、公演を成功させた時の喜びは今でも忘れません。

竹原茂先生から受けた感化

3年生からは、入学時からの希望であった国際協力を学ぶため、竹原茂先生のゼミに入りました。同時に、他大学の学生と共に国際協力を学ぶサークルに所属するなど、それまでとは違った学びの日々を過ごしました。



竹原茂先生を囲んで

特に竹原先生には

大変可愛がっていた
だき、ゼミ長やTA
の仕事を通して先生
のそばでお手伝いを
しながら、先生の人
格的感化を受けられ
たことは本当に幸せ
なことでした。先生

からは、国際協力、
麗澤大学の今昔、先
生の人生、学生との
向き合い方など、幅

広く沢山のことをお話しいただきました。また、先生が立ち上げに尽力されたタイのメーコック財団への研修旅行には、二度も参加させていただきました。

タイでの学びは、その後の私の考え方を大きく変えてくれました。メーコック財団に暮らす、さまざまな事情で親と一緒に住むことの出来ない子供たち。物が周りに溢れていないからこそ一つのヘアピンを、一本の鉛筆を大事に出来る。ノートに書いた文字を消して繰り返し使う。ご飯作りや掃除などを皆で協力して楽しんで行う。皆で楽しく無邪気に遊ぶ。手を合わせて感謝する……。そんな子供たちの姿や笑顔に、私はそれまでの自分を反省し、もっと感謝することを、そして自然や物、人、時間、機会を大切にすることを教えるもらいました。

就職課程の勉強を通して

3・4年生の頃は、英語の教員免許取得のため、同じ目標を持つ友人たちと共に学び、夢を語り合えたことも幸せなことでした。特に思い出に残っているの

は、望月正道先生の英語科教育法の授業です。一人ずつ教壇に立ち、皆の前で考えに考えた模擬授業を行い、先生やクラスメートにアドバイスをもらおうという授業でした。これがとても勉強になり、楽しかったのを今でもよく覚えています。そして、麗澤大学での学びや出会いのおかげで、将来は英語教員になり、自分の経験や能力を生かしながら子供たちの成長のお手伝いをしたいと思うようになりました。

母校の国際コースの教員として

大学卒業後は、母校である麗澤高校の国際コース（現Iレコース）で、英語教員として5年間勤務しました。ここでは、高校時代の恩師であるジョリフ・マーク先生や森川嘉之先生に熱心にご指導いただきました。国際コースは、授業も生徒たちとの会話もオールイングリッシュ。授業は生徒中心の考えさせる授業です。学びの楽しさが伝わるLESSンプランやカリキュラムの作り方、生徒たちとの関わり方、教員としての心構えなどに加え、生徒のためには努力を惜しまずい

くだけでも時間と心を使うことなどを、身を持って示し、教え、育てていただき、学びの多い教員生活でした。

寮担任として

また、麗澤高校女子寮出身であった私は、3年間女子寮の担任も務めさせていただきました。親元を離れて暮らす生徒たちを見守るといのは責任の重い仕事でしたが、支えになったのは、周りの先生方と創立者廣池千九郎先生が残された言葉の数々でした。廣池先生は、その時々、私が求めている答えを教えて下さるようでした。例えば、「父母の心をもって人類を愛す」という格言のように、生徒たちを心からかわいと思いい愛するようにすると、生徒たちと心の距離が縮まるように思いました。また、うまくいかない時には、「相手が自分の至誠を受け取ってくれるかどうかは別とし、自己の誠の至らざるを反省し、不徳を神に謝罪し、ますます至誠慈悲、気長く見守る心で時を待つことが大切」という言葉をかみしめ、生徒たちのこ



とを祈るようにすると、その状況が改善していくという経験をしました。英語教員として授業を持ちながら寮担任をすることは簡単なことではありませんでしたが、これ以上ない成長の日々でした。

結婚・出産・今

平成21年12月、麗澤大学に勤める主人と結婚し、23年に長女、25年に長男を出産し、現在は麗澤大学の近

くにある職員住宅で楽しく子育てをしています。沢山のお友達に恵まれて子育て出来ること、そして卒業しても母校をこんなに近くに感じる事が出来ることを本当に嬉しく思っています。麗陵祭には毎年参加していて、子供たちはマスクットキャラクターのれいたくんとれいこちゃんの大ファンです。

今回、本誌に執筆という機会をいただき、改めてこれまでの自分自身を振り返ってみて、やはり今の私があるのは麗澤大学のおかげであると実感しました。これからも麗澤大学のそばで、麗澤大学を愛し、微力ながら支えていきたいという思いです。そしていつか、麗澤大学、高校で得た沢山の価値ある学びを次世代を担う子供たちに伝えていくことで、少しでも恩返しができるようになったらと、今また新たな夢を持ち始めています。

人生の礎となった大学時代

特定非営利活動法人グッド代表 磯田浩司

(第55期 英語学科卒)



私が団体を立ち上げて、今年で15年目になります。

団体名は、the Global Organization of Dreamersの頭文字をとって、good! (グッド)。直訳すると、「夢見る者たちの国際集団」。日本語で見るとなんだか怪しげですが、英語圏の友人たちには「素敵な名前だ」と褒められます。コンセプトは「不登校・ひきこもり経験者を含む、すべての若者へのきっかけ作り」。分野としては、国際協力と若者の自立支援の2つの分野に跨っており、どちらも一般的にはあまりなじみのない分野なので、少し具体的にお話ししたいと思います。

ワークキャンプ、共同生活寮、そしてフリースペースというのが、活動の3つの柱です。ワークキャンプ

と聞いて、ピンとくる方がどれだけいるのでしょうか。「キャンプ」と言うとうろくしても、飯盒とカレー、テントとキャンプファイアのイメージが浮かんでしまいますが、ちょっと違います。第一次世界大戦後、平和に向けて何かしたいと、若者たちが国境を越えて戦後の復興活動をしたことが始まりと言われ、そこから世界中に広がった活動です。課題のある地域に若者たちが入り、寝起きを共にしながら課題解決のためのワークを行う合宿型のボランティア。それがワークキャンプです。グッドでは、20名前後の若者と共

にタイやスリランカなどアジアの国々の貧しい村を訪れ、井戸を掘ったり道路を作ったりする海外のプログ

ラムの他、国内でも、課題を持った地域やそこに取り組む団体とともに、農業や酪農などを行うキャンプを行っています。

ワークキャンプを行っている団体は日本国内にもいくつかあるのですが、中でも私たちの活動の特徴は、



その参加者に

あります。中学生から大学生、専門学生など学生はもちろん、会社員、教員、保育士、看護師、新聞記者からお坊さん、不登校やひきこもり経験者まで、本当に様々なバ

ックグラウンドを持つ若者が集まってきました。パリの体育会系大学生もいれば、「10年間ひきこもっていました」、なんていう若者もやってきます。これまでに十代から四十代まで、2000人を超える若者が参加しています。

共同生活寮は事務所に併設されており、ひきこもりなどの経験から対人関係に苦手意識を持つ若者たちが、寝起きを共にしながら自立を目指して生活しています。また、事務所はフリースペースとしても開放。一般的に「フリースペース」と言うと、不登校やひきこもりの若者たちが集まる場所を指すことが多いのですが、私たちの対象はもっと幅広く、全国、そして世界から様々な背景を持つ若者たちが集まり、一緒に食事を取りながら、楽しいひと時を過ごしています。

今回、この原稿の依頼を受けたのは、昨年、私の恩師でもある梅田徹先生の授業に、ゲストスピーカーとして呼んでいただいたことがきっかけでした。団体を立ち上げ当初から、様々な高校や大学に呼んでいただき、若者たちに語りかける機会をいただくことが多か

ったのですが、母校である麗澤大学でお話しできたのはその時が初めてでした。十数年ぶりに降り立った南柏の駅は、私の知っているそれとはまるで別の場所に様変わりしており、一瞬わからないほどでした。それでも、キャンパスまでの道を歩きながら、あの頃のこととが少しづつ、そして鮮やかに蘇ってきました。

入学式を終え、未知の大学生活に期待と不安でいっぱい私の私を待っていたのは、全国から集まってきた仲間たちとの出会いでした。高校まで関東以外の人間と関わったことのなかった私は、日本各地からやってきている友人たちと過ごす時間が楽しくてたまりませんでした。そんなある日、自宅から通っていた私が仲間を訪ねて「男子寮」に足を踏み入れた時のあの驚きを、今でもよく覚えています。ここでは、私が見たことのない毎日が繰り返り広がっていました。仲間同士、料理を分担して同じ釜の飯を食い、大浴場で裸の付き合いをし、夜は遅くまで人生について語り合う。試験勉強もすれば、恋愛相談もする。ひとつ屋根の下に仲間たちが住んでいるという寮での生活は、私にとって

居が下がり、垣根を越えてたくさん仲間が集まってくれました。皆で何かを達成すること。お互いを本当の意味で分かり合うこと。時には皆で腹を抱えて笑い、夜を徹して議論し、肩をたたき合って励まし合う。自分の中の常識が何度も崩れ去り、そして新しい価値観が生まれました。私がそこで学んだことの多くが、43歳を迎えようとしている今でも、私を励まし、支え、そして戒めてくれています。リーダーシップについてはもちろんのこと、様々なバックグラウンドを持つ人たちと向き合い始めるきっかけとなったように思います。

そして、2年後期からのアメリカへの留学。あの、1年足らずの海外生活が、私の人生に与えた影響も計り知れませんが、海外で暮らしてみたい、流暢に英語が話せるようになってみたい。そんな軽い気持ちで決めた留学でしたが、そこでの出会いや経験は、私の価値観や物の考え方、いや、大げさに言えば、人生への取り組み方のようなものまで変えてしまったように思います。英語というコミュニケーションツールを手に入

終わりのない修学旅行のように魅力的なものでした。友人たちの厚意に甘え、日替わりで泊まり歩く私を見かねて、寮長が入寮を薦めてくれ、夏からは晴れて寮生となれたのですが、今思い返しても、本当に濃密な日々でした。あの寮生活がなければ、人と人がこんなにも深く関わることはできるのだということを、私は知らずに生きてきたのかもしれない。私が運営する共同生活寮も、あの寮生活の影響を色濃く受けていると思います。

サークル活動での学びも本当に大きかったと思います。どうすれば人は表面的でない、腹を割った関係を作れるのか。それが大学入学当時から私の大きなテーマでした。多様な人々と関わりたい。運動部も文化部も、外国語学部も経済学部も、とにかく違ったことをしている人たちが交わる場所を作りたい。そんな思いで立ち上げたのが、「うそつきサークル」です。名前はふざけていますが、私は大真面目でした。いろいろな背景と考え方を持った人たちが集まる場づくりに夢中になっていました。ふざけた名前のおかげで敷

れた、ということももちろん大きな成果でしたが、同時に、様々な国々からの留学生との出会いによって、アジアの中の日本、というものを意識するようになったこと、そして、そこからアジアの国々を旅するようになったことは、本当に大きな出来事でした。すっかり旅の魅力に取りつかれ、これまで旅した国は60か国以上。今では世界中に、愛すべき仲間がいます。電気もガスも水道もないジャングルの村で井戸を掘り、学校を作る活動を続けていられるのも、あの留学があったからなのです。

40歳を過ぎても、年に何度も世界中を飛び回り、日々若者たちと向かい合う生活をしているなんて、あの頃の私は想像もしていませんでした。それでも、こんなに楽しい仕事はない、こんなに幸せな人生はないと思いつつ、愛すべき家族や仲間たちに囲まれて過ごしているこの現在が、あの麗澤時代から始まっているのだと思うと、やはり人生は予測不能で、だからこそ本当におもしろく、これまでのすべての出会いに感謝せずにはいられません。

第51回麗陵祭を終えて

第51回麗陵祭実行委員会委員長

高橋 秀斗

(経営学科3年)



麗陵祭（11月1日から3日）3日目の最後に麗陵祭実行委員会のメンバーだけで行われるフィナーレ2部。委員長としてスピーチをさせていただく場で私はたくさんの涙を流しました。私の人生の中でここまで泣いた記憶はなかったですし、今振り返ってみると、その涙には今まで抱えていたたくさんの不安や緊張、数多くの達成感が詰まっていたんだと感じます。

2014年度という私達の1年間は、51年という麗陵祭の長い歴史の中でも稀に見る1年だったと思います。前年度の決算報告の遅れやその他の問題により、予算の再検討・削減や6月と7月という準備をしていく上で重要な2か月を活動自粛という状況下で再スタ

おります。

第51回の麗陵祭のテーマは「ココロオドル」でした。一人ひとりが主役となり、麗陵祭という大きな舞台を作る。そこで感じる喜び、興奮、楽しさ、そんな「心躍る」瞬間を全ての人と共有したいという意味を込めていました。正直なところ、麗陵祭の当日を迎えるまで私は楽しみという気持ちよりも不安・怖いという気持ちの方が大きかったことを覚えています。しかし、初日のお昼ごろにオープニングセレモニーが終わり、ようやく落ち着いて敷地内を見回っていると来場者の方々のたくさんの笑顔や喜んでる表情、おもてなしをしている麗大生の活き活きしている表情を見ることが出来ました。その瞬間、今までの迷いや不安は一切吹き飛び、ここまで諦めずにやってきて良かったなと感じることが出来ました。

私が委員長としての1年を終えて、自分自身、一番成長したと感じ、それと同時にこの1年で最も気を遣っていたことは多くの立場から物事を捉え、発言することだったと思います。私が思っていた以上に委員長

1トするという準備期間でした。一時期、今年の麗陵祭は開催できるのかという話がでるほどでしたし、私たち実行委員会自身もこのような不安定な状態・体制下で開催してもいいのかという不安があったことも事実です。ただ、そうした中で今年度も無事に麗陵祭が開催できたのは、私達のことを支えてくれている人たちのおかげでした。私が委員長としてこの1年間強く感じたのは、どのような活動や行動をするにせよ、多くの人が私たちのことを気にかけサポートしてくれていたということ。そういった意味でも、今年度はより一層、周りの人々の支えがあり、毎年開催出来ているということを感じることに出来た年だとも思っ

としての発言は言葉に責任があり、他のメンバーに影響を持っていました。だからこそ、言葉を受け取る立場、来場者の立場や参加いただいた団体や麗大生の立場等、委員長としての立場を考慮しつつも様々な立場に立ち、発言をするように心がけました。また、「委員長として忙しそうだね」「200人以上のメンバーをまとめるのって大変でしょ」という声をたくさん頂きましたが、私自身、この1年間で忙しかったと感じた時期やメンバー全員をまとめたという意識は少しもありません。むしろ2か月という遅れを取り戻すために、忙しかったのは各実行委員たちであり、毎日頑張っているみんなの姿を見て僕の方こそもっとやるべきことはないかと感じさせられるほどでした。また、メンバー達をまとめるのは各局の局長たちであり、私はどちらかという少しづつ麗陵祭に向けて動いている集団から作業や精神的に遅れている人たちがいないかを最後尾でパトロールしている意識でいるように心がけました。以前までの委員長像は、組織の中心人物としていつもスポットライトを浴びているイメージで

したが、いざ委員長になってみると人目に付かない役割も多く、みんなの目につかないところでどれだけ貢献できるかが勝負なんだなとも感じました。

今年も学園祭を開催する意義から考え、もう一度初心に帰る年になったと思います。だからこそ、第51回の麗陵祭を終えた今、委員長として胸を張って言えることは、どのような状況に置かれても麗陵祭は開催するべきだということです。麗澤大学・麗大生を社会や地域により身近に感じられるように発信する数少ない機会ですし、多くの人に麗澤大学を知っていただくチャンスです。そして、毎年楽しみに待っていていただく地域の方々もいて、私たちの活動や想いは成り立っていると感じました。これまで多くの人が、素敵な時間を麗陵祭と共に過ごしたことでしょ。麗陵祭には私

たちを含めた数多くの人たちによる51年分の思いが詰まっています。そして、無事に麗陵祭を終えた今、これだけの思いが詰まった麗陵祭をこれから主役となるメンバー達が作っていく未来に引き継ぐことだとも思っています。

高校の部活を引退し、15年間続けていたサッカーに一区切りをつけ、たくさんの仲間達と同じ目標に向かいここまで熱くなることは私の人生の中でもうないだろうと思っていました。そんな矢先に、毎日遅くまで会議や話し合いを重ね、いつの間にか自分の生活の中心となっていた麗陵祭。たくさんの頼れる仲間たちとの出逢い、授業では決して経験することのできない体験、私は自分の学生生活を誇りに思うと同時にこのような機会を与えてくれた環境に感謝しています。

コラム

第11回ホームカミングデイ2014開催報告

——副委員長としてホームカミングデイを通して感じたこと

外国語学部准教授 齋藤貴志



昨年12月某日、学内メールに1通のメールが届いた。そのメールを開くと、『麗澤教育』21号に掲載する第11回ホームカミングデイ2014の開催報告を執筆してほしい」という内容のものであった。昨年11月2日に成功裏に終わった(と勝手に思っている)段階で、ホームカミングデイのことはすっかり忘れていた。「今更私に開催報告が書けるのか」と思い、お断りのメールを出そうとしたが、結局お引き受けすることにした。

これまで何度か一委員としてホームカミングデイには参加したことはある。その中で今回が一番印象深い。それは副委員長という大役を仰せつかった上での

参加というのが一番の理由であった。生来、私は〇〇長と名の付くものが性に合わず、嫌いであった(今でもそうである)。そんな私がいきなりホームカミングデイ委員会の副委員長に選ばれてしまい、正直戸惑った。井出元ホームカミングデイ委員会委員長には何気なく、否、かなり前面に押し出して「無理です！」という声を出していたつもりなのだが、虚しく失敗に終わる、2014年4月から副委員長として活動することになった。

第1回の会議で井出委員長が、「委員のみなさんがまずは思いっきり楽しみましょう！」と仰ってホームカミングデイ委員会がスタートした。そのあとにホー

ムカミングデーの趣旨説明があった（と記憶している）。趣旨を私なりに解釈をすれば、教職員や在学生との親睦・交流を通して卒業生にいつでも麗澤という帰れる場所があるのだという意識をもっていてもらいたい。いつまでも麗澤に対する愛情つまり「麗澤愛」をもっていてもらいたい。そのために教職員・在学生が一丸となって卒業生を「おもてなし」の精神でお迎えしましょうということだと思う。その時ふと思っただ。私には「麗澤愛」はあるのかと。

私は副委員長兼イベント班リーダーという立場にあったので、ホームカミングデー当日のイベントについて考えることが役割の一つであった。上記の趣旨に合うイベントとはどのようなものか、これまでのイベントとは違うものはないだろうかなど、イベント班の他のメンバーと何度も相談を繰り返した。そしてほぼ半年間に亘る準備期間を経て、最終的に次のようなイベントが開催された。

午前中は、第1回から第10回までの集合写真、教職員からのウエルカムメッセージなどを展示した。準備麗大生に足りないもの、望むものといった核心に迫った話まで熱く語っていただいた。中川先生は中国語学科卒の私の大先輩にあたる方である。その大先輩のお話を身近で拝聴することができて、本来ならば私にとって非常に有意義な時間であったはずなのだが、実際はそれどころではなかった。なぜか。イベント③「卒業生パネルディスカッション」と題して卒業生3名に登壇していただき、学生時代の恩師、学生時代の思い出、学生時代に得たものなどを各々お話ししていただいた。これまで副委員長兼イベント班リーダーとしてほとんど役に立っていなかったもので、僭越ながら司会進行役を務めさせていただいた。この準備があったので中川センター長のお話をじっくり拝聴できなかったのだ。実はこのセクションが最後の最後まで苦労した。登壇していただく3名のうち2名は、中澤裕隆さん（第55期 経済学科卒）、重藤有乃さん（第72期 経済学科卒）ですすでに確定していたのだが、最後の1名がどうしても決まらず、当日参加してくれた私の同級生、影山優さん（第58期 中国語学科卒）にその場でお願い

段階で、ご年配の方から卒業したばかりの若者たちが一同に会している全体写真を目にしたとき、世代を越えて麗澤に対する愛情は変わらないのだと感じた。また職員からのウエルカムメッセージ掲示は今回初の試みだったが、かなり好評だったようだ。

午後はいよいよメインのイベントとフィナーレである。イベントは今回3つ用意した。イベント①学生とのコラボレーション企画ということで、学友会会長の木村翼さん（経済学科3年）から今年度の学生の活躍について報告いただき、続いて落語研究会による「ホームカミングデー落語」では西村慎太郎さん（経済学科4年）が日頃の練習の成果を發揮し、まるで寄席にいるかのようなすばらしい落語を披露してくださいました。参加していただいた卒業生の方には在学生がいかかに頑張って活躍しているかを再確認していただけたと思う。イベント②「中川敏彰センター長に聞く！」と題して中川キャリアセンター長に登壇していただき、40年振りに教員・キャリアセンター長の立場で母校に戻って来られた先生に、多彩なご趣味の話から、今の

いした始末である。このドタバタ劇で始まったパネルディスカッションだが、佳境にさしかかったとき、私は最後の質問として次のような質問を3名のパネラーに投げかけた。「生まれ変わってもまた麗澤大学に入りたいですか」と。回答は3名とも「また入りたい」だった。ここでも集合写真のとき感じたのと同様、世代を越えて麗澤に対する愛情は変わらないのだと感じた。

イベント関係で忘れてはいけないのは、昨年也好評であった大人のキャリアパーである。ここは今年も教職員と卒業生の語り合い場として非常に好評だった。今年は初の試みとして、経済学部・外国語学部の教員が常駐していた。私はなるべくいるようにしたのだが、至る所で久々に会った先生や友人たちと談笑している光景を目にすることができ、自分のことのように嬉しい気持ちになった。

ここまで主に私が担当していたイベント班に関することをお話ししたが、ホームカミングデーが成功するには、決してイベント班だけで成り立つものではない。

ホームカミングデイ委員会は井出委員長を筆頭に、副委員長3名（楠田正義さん、吉田健一郎先生、齋藤）およびイベント班、広報・グッズ・記念品班、同窓会推進班、麗陵祭との調整班、事務局班など各班の委員、学友会、麗陵祭実行委員会から構成されている。広報・グッズ・記念品班は幅広く広報するために、今年にはFacebookを最大限活用した広報活動をおこない、新規グッズを7点（フリクションボールペン、風呂敷、ふせん、クリアファイル、マルチカパー、バッグハンガー、タンブラー）と記念品1点（爪切り）を作成してくれた。その他の班も当日の成功を目指してそれぞれの責務を全うしていたのである。みなが一致団結して、「おもてなし」の精神で卒業生をお迎えしよう、ホームカミングデイを成功させようとしたのである。私は副委員長としてほぼ半年間この光景を何気なく目にしていた。その中で次第に私はなんとも言えない

感情を覚えた。これが麗澤に対する愛情、つまり「麗澤愛」なのかと。私自身、母校に専任教員として就職して今年で9年目（もうすぐ10年目）になる。母校が職場であるといった意識はあったものの、母校愛があったかと聞かれたら返答に窮する。考えたことがなかった。それが今回、副委員長という立場でホームカミングデイを経験させていただいたことで、その気持ちに微妙な変化があったのかもしれない。どう変わったのか？ 正直言って自分でもよくわからない。しかしそのような気持ちの変化に気づかせてくれたホームカミングデイとホームカミングデイ関係者に感謝したい。委員のみなさん、今年のホームカミングデイに参加してください。みなさん、本当にありがとうございます。

これをもって開催報告に代えさせていただきます。

＜コラム＞

一歩踏み出して得た“人生を変える経験”

石井千晃

（英語コミュニケーション専攻4年）



2011年に麗澤大学の全米模擬国連大会への挑戦が始まりました。私は第3期、そして第4期はリーダーとして大会に出場させていただきました。模擬国連大会は、参加する学生に国際問題や外交関係を学ぶ機会を与え、国際社会で活躍できる人材を育成することを目的としています。実際の会議ではスピーチと議論を交互に行いながら、他国の代表と互いに協力、交渉し合いながら与えられた議論に沿った解決策を作成します。2014年の大会には日本から麗澤大学の他に、東京大学、筑波大学や同志社大学のチームの出場があり、模擬国連の活動は年々日本国内でも活発になってきているように思います。

2度目の挑戦を終えた今、様々な思いが込み上げられます。試行錯誤を繰り返した政策提案書の作成、国も学ぶ分野も様々な学生たちとの出会い、そしてチームのメンバーと互いに切磋琢磨し合い過ごしたかけがえない日々を思い出すと、胸が熱くなります。

私が全米模擬国連大会へ挑戦したのは、留学した仲間の存在が大きくありました。3年になった春、共に学んでいた仲間が次々と世界各国へと旅立っていきました。頑張っている友人に日本にいる私も負けたくないという思いがあり、やらないで後悔するならば、やっ

て後悔しようと思いましたが、語学力が足りない自分

分にもできることはあると信じて活動していました。あつという間に出発の日を迎え、不安と緊張でいっぱいでしたが、同時に期待に胸も膨らんでいました。忘れられない経験の一つが、大会中に行ったスピーチです。あまりの緊張に足の震えが止まらなかったこと、無理矢理声を絞り出し、喉が痛くなったことを今でも覚えています。積み重ねた練習が自分を支えてくれたのです。スピーチを終え席に戻ると、近くにいた各国の代表たちが「Good job」、「cool」と言いながら手を差し出してくれました。握手をしながら、安堵と喜びで胸がいっぱいになりました。

第3期としての挑戦を終えた後、第4期のリーダーに挑戦すると決めるまでには、とても悩みました。大会を終えて純粹に楽しかったという気持ちと、同時に悔しさも残っていました。自分の心の中にもう一度挑戦したいという気持ちがあることに気づいた時、私はやらない言い訳を考えることを止め、リーダーという更に大きな挑戦をすることを決めました。

受賞こそ逃しましたが、私たちはこの活動を通して

ました。何かを成し遂げようとする時、自身の力はさることながら、仲間、そして周囲からの支援をなくしては成功させることはできません。模擬国連の活動は、本学の教育理念である「知徳一体」を実践しながら学ぶものでした。

この会議では、世界の公用語である英語でコミュニケーションを取ることはもちろん、世界の問題に対しての広い見解を持ち、斬新かつ実現可能なアイデアを発言することが求められます。まさに世界を体感する場であり、自分の課題に気づかされる場でもありました。

会議中、前年の大会で同じ委員会に参加したアメリカの友人と再会することができました。共に前年の大会が模擬国連への初めての挑戦で、今年は共にチームを率いる存在になっている、そのことが私たちをとっても感動させました。

この活動は「自己への気づき」であると思います。世界の場に出て初めて、私たちは世界の中での自分のレベルを知ります。しかし同時に、「自分でもやれば

限りなく有意義な時間を過ごし、多くのことを学びました。メンバーそれぞれが得たものは違ったとしても、この経験が間違いなく私たちの人生の糧になると信じています。私たちの挑戦を語る上で、「仲間」の存在は欠かすことができません。大会までの準備期間、私たちは何度もミーティングを重ねましたが、和やかな雰囲気の中で語り合うだけではなく、時には激しく互いの意見を衝突させることもありました。一人ひとりが真剣に活動に向き合ったからこそであり、その中で強い絆が生まれ、私たちはお互いを尊重することの大切さを知りました。



顧問のポール・C・マクヴェイ教授を囲んで

できる」ということに気づかせてくれたのも、この活動です。もっと英語力を磨きたい、もっと世界を知りたいという熱い気持ちに気づかせてくれました。目標に向かって努力する有意義さ、そして諦めなければ道は開けるということを、私はこの活動を通して学びました。

何もしなくても会議の3日間はあつという間に終わってしまいます。全ては自分次第です。そしてそれは学生生活にも同じことが言えます。私たち第4期生は、全員がこの活動に一步を踏み出したことで、かけがえのない仲間と学びを得ることができました。この団体の活動に限らずあらゆることに挑戦し、様々な経験をすることで、充実した学生生活となり、自身の成長に繋げることができると思います。

大学時代に情熱を持って取り組むことができる活動に恵まれ、多くの支援を受けながらこのような素晴らしい経験をさせていただけただけのことを心から幸せに思います。私にとって模擬国連は「人生を変える経験」でした。

茶道部裏千家と交流茶会

茶道部裏千家OB・OGの中には、社会人になった今でも黒川宗知先生（茶道裏千家正教授）のご指導のもと、稽古を続けたり、茶道部のイベントで後輩をサポートしたりと深く繋がっている。

今や恒例行事となった本学キャンパス内の貴賓館での交流茶会は、毎年、近隣の方々をはじめ他大学の茶道部員など一〇〇名近くの参加があり、晩秋の貴賓館の景色を楽しみに訪れる方も多い。卒業を控えた4年生にとっては集大成の場でもあると同時に、年に一度、卒業生が各地から母校に帰る同窓会のような雰囲気もある。そんな絆で結ばれた茶道部裏千家の卒業生と学生との交流茶会、恩師、茶道への思いなどを紹介

したい。

感謝と思いやりの心

鈴木真由美

（第67期 英語学科卒）



私は、大学2年生のときに、裏千家茶道部に入部し、卒業して7年経つ現在も月に3回黒川宗知先生宅で茶道を学んでいます。茶道を通じて学んだことは数多くありますが、ここでは3つお話しさせて頂きたいと思います。

1つ目は、感謝の気持ちや相手への思いやりの気持ちを自然に表現できるようになりました。お茶では、お客様同士で「お先に」「どうぞ」「お相伴いたしません」という言葉を交わします。このような美しい言葉をお稽古で使っているうちに、相手への敬いの気持ちを日常生活でも自然に表現できるようになり、心が豊かになりました。

2つ目は、「美」に対する感性が柔らかくなりました。お茶は季節や趣向に合わせて、お道具やお花、お菓子

を取り合わせます。お茶を始めてから、四季の移りかわりの美しさや楽しさをより感じる事が出来るようになりました。

3つ目は、「おもてなしの心」を学べることです。茶の湯のおもてなしとは、合理的で美しくとも行き届いたも

のです。例えば、お釜を置く位置ひとつとってもお客様のことが考えられた配置になっています。暑い夏はお客様から熱いお釜を遠ざけ、寒い冬は少しでもあたためたいようにお釜の位置がお客様に近くなります。こうしたお客様を思いやる心や創意工夫の心がお点前の中には詰まっています。お客様に気持ちよく美味しいお茶を召し上がっていただきたいという心が精神的なおもてなしの心、美しい豊かな日本の心を育むのだと思います。

社会人としての基本を学ぶ

石毛愛美

（第71期 英語・英米文化専攻卒）



茶道部に入部したきっかけは単なる興味からでしたが、そのときはここまで私の中で大きな存在になると思いませんでした。茶道部裏千家は、私に多くものを学ばせ、また与えてくれました。



まずは、日本の文化にきちんと触れ、知ることができました。茶花やお菓子、季語などを通して改めて四季を感じることで、日常の楽しみが増えました。例えば道を歩いていて、今まで以上に草木や花に目が行くようになったり……。

また、黒川宗知先生が日々仰っていた「報告・連絡・相談」。在学中はもちろんです、社会に出た今だからこそ重要なのだと実感しています。礼儀・作法をはじめ社会の基本までも教えてくださった先生には本当に感謝しています。

そして、茶道部を通して私は友達・先輩・後輩と幅広い交流を持つことができました。お茶会の際には皆さん仕事も住む場所も異なる中、卒業後も「茶道部裏千家」のために力を合わせられることはとてもすごいことだと思います。それほど皆さんにとっても、また私にとっても茶道部は大切な存在なのだ、と。

私を成長させてくれた茶道部裏千家、ありがとうございます！

家族のような絆と和の心を育てる

末光由佳

(第72期 英語・英米文化専攻卒)



茶道部裏千家での経験や出会えた人とのつながりは、私の大切な宝物です。普段、お点前をするときのように、平常心かつ相手への思いやりをもっているか。お道具を扱うように物を大切にできているか。亭主やお客様、同席のお客様への心遣いのように、一緒にいる人と気持ち良く時間を過ごそうとしているか。茶道で学んだ心構え・心遣いが、卒業後の今も、私の大切にしたい軸となっています。

また、私にとって茶道部裏千家は家族のような存在です。同期は学生時代と変わらず励まし、支えてくれます。先輩方は後輩の心に寄り添い手本を見せてくださいます。そして、先生は常に母のような温かい祈りでもって、私たちに茶道だけでなく生活面もご指導くださいます。先生や先輩方のような社会人、女性になる

ことが目標です。これからも茶道部裏千家の縦と横のつながりを広く深く、一層豊かにしていきます。まだ出会えていない先輩やこれから出会う後輩の皆さんとつながりも築けることを楽しみにしております。

「和敬清寂」の心で

小川 佑樹

(経済学科4年)



私は3年生の途中から、約2年間、麗澤大学茶道部裏千家の一員として活動してきましたが、今回は大きく2つのことをお伝えしたいと思います。

1つ目は、茶道を通じて人として大きく成長できたということです。茶道の心得を示す標語に「和敬清寂」という言葉があります。「和」とは心を開いて仲良くすること。「敬」は互いを敬うこと。「清」は清らかな心であるということ。「寂」はどんなときも動かない心という意味です。お稽古の時だけでなく日々の

学校生活やアルバイトの中でもこの「和敬清寂」の心を意識し、内面的な部分で大きく成長したと思います。2つ目は、茶道部裏千家が多くの方々に支えられていることです。活動の一環として、多くのお茶会を開催しましたが、その際、部員だけでなく職員の方やOB・OGの先輩方にご協力を頂きました。昨年の12月に麗澤大学貴賓館で行われた交流茶会では、卒業して10年以上の先輩、沖縄や名古屋に住んでいる先輩方がその日のために駆けつけ、協力してくださいました。私はそのとき、どの部活にもない強い団結感と豊かな絆を感じました。

これから私は社会人になります。この茶道部での経験を生かすと同時に、今後はこの麗澤大学茶道部裏千家のOBとして支えていきたいです。

日本文化の伝統を受け継ぐ道

根本大輔

(経済学科4年)



私が茶道を学び始めて半年以上が過ぎましたが、振り返ればとても充実した時期を過ごしてきたと感じます。その期間、黒川宗知先生からは茶道の作法や知識のみならず、人としての礼儀や立ち居振る舞い、そして古来より続く日本文化の伝統を受け継ぐことの尊さを学びました。

また度々、先生やOB・OGの方々のご紹介により、外部の茶会やセミナーに出席することで自らの視野を広める機会を得ることができ、一人の日本人としての成長を実感し、また来年度より新社会人として立つことへの心構えができました。

私が麗澤大学の茶道部裏千家に入部したのは、昨年の4月でした。茶道を始めて日が浅い私がこれまで学んだことの集大成を披露する場こそが、昨年12月6

日に麗澤大学貴賓館にて行われた交流茶会でした。黒川先生やOB・OGの方々のご指導・ご協力もあり、交流茶会では多くのお客様に好評をいただき結果となりました。私としても作法を褒めていただき、振る舞ったお茶をおいしく召し上がっていただいたことに感激しました。

このような体験を、後輩たちにもぜひ経験してもらいたいのです。

日本文化の素晴らしさに触れる

俣木 翔

(経済学科4年)



昨年12月開催の交流茶会は、学生生活最後のお茶会だったのでこれまでとは違った特別な思いがあり、自分自身の大きな集大成でした。早朝から入念に掃除を行い、必要な道具を揃え、当日の流れをメンバーと何度も確認し、最高のおもてなしができるように心がけ

しました。お点前中も一つひとつの動作を慎重に行い、特にお茶を点てる時は気持ちを込めて練っていました。お客様から「お点前が綺麗で、お茶もおいしかったですよ」という言葉をいただいた時はとてもうれしい気持ちになりました。このお茶会を無事終了できたのは黒川宗知先生をはじめOB・OGの先輩方、そして部員の皆さんの支えがあったからこそだと思います。私は、茶道を通じていろいろな視点から日本文化の素晴らしさと魅力、そして奥深い道徳の一端を学ぶことができました。社会に出ても「茶道の心構え」、お茶の精神を忘れず活躍していきます。

初めて茶道部に入部して感じたこと

渡邊泰晃

(経済学科3年)



私が茶道を始めたのは、大学3年生になってからでした。残りの1年は大学でしか出来ないようなことを

したいと思い、茶道部裏千家に入部しました。入部して約半年後に交流茶会の開催についての連絡があり、茶道を始めて未だに人前でお茶を点てる事も覚束ない状態でしたが、交流茶会には茶道部裏千家のOB・OGの方々やその他の一般のお客様が来場され、そういった人達の前でお茶を点てる事はなかなかないのではないかと思います。自信は無かったです。交流茶会に参加しました。

最初にお茶を点てた時は茶碗の拭き方や茶杓の向きなど様々な箇所を間違えてしまったけれど、間違えても先輩や来場されたお客様から優しく注意していただき、2回、3回とお茶を点てる毎に作法を覚え、最終的には自信をもってお茶を点てることが出来るようになりました。この交流茶会を通して、茶道に対してさらに興味が湧き、ますます交流茶会に参加してみたいくなりました。また、今春入学してきた新入生には、ぜひこうした機会を経験してもらえればと思います。

- ◆ 本号は「人間教育」を特集しました。教育は人を育てることであり、教育の目的は、どのような目標に向かって、人をどう育てるかです。「確かな学力」と「豊かな心」を育成し、「生きる力」を育むにある、と言われていきます。
- ◆ 中山学長からは、「なぜ麗澤大学で道徳を学ぶのか」と題しての「特別寄稿」をいただきました。「道徳の学びは、時期を特定せず、生涯続けるべき課題である。大学生として当然学ぶべき道徳があつてしかるべきであろう」と書き記してあります。じっくりお読みいただきたい。
- ◆ 井出副学長には、「リーダーを啓発する」と題しての原稿をいただきました。本学での「リーダーセミナー」の主旨・成果等が詳細にわたり述べられています。学生時代におけるリーダーとしての体験は、社会人として巣立っていくうえでの重要な経験として植えつけられ、確実に、人として大きく成長していくための糧となっています。
- ◆ 世界大学総長会総会でスピーチした学生、麗澤国際交流親睦会の代表、就活アドバイザーやNSプロジェクトの代表者、課外活動や学生寮のリーダー、そして学生アドバイザーたちが、それぞれの活動に取り組んで得たものは、多くの学びと彼ら自身の成長でした。
- ◆ 2020年の東京五輪開催が影響してか、日本を訪れる外国人観光客が過去最高の勢いで増えています。そんな中、外国人の日本観光を手助けするボランティアグループが現れています。本号に掲載した「おもてなし…ホスピタリティープロジェクト」もその一つで、東京・浅草、上野公園などで道案内した学生たちの喜びと感動の記録です。
- ◆ 本誌の内容に関するご意見・ご感想等は、麗澤大学学務部入試広報グループまでご一報ください。

麗澤大学学務部入試広報グループ

『麗澤教育』第二十一号

二〇一五年四月一日

編集 麗澤大学学務部入試広報グループ

発行 麗澤大学

〒二七七―八六八六

千葉県柏市光ヶ丘二―一―一

電話 ○四―七二七三―三〇三〇

印刷所 ベクトル印刷(株)

表紙 株式会社エヌ・ワイ・ピー

